
この空の下、大地の上で

架音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この空の下、大地の上で

【Nコード】

N0752BA

【作者名】

架音

【あらすじ】

気が付いた時、そこはどことも知らない深い森の中だった。ごく普通のサラリーマンであったはずの東雲晶はその混乱の中、己が無力な少女に成り果て、あまつさえ呆然としていたところを巨大な狼に襲われそうになるという異常事態の中、晶は一人の剣士にその命を助けられる。

異世界から訪れた少女（中身は成人男性）と一人の剣士の出会いが何をもたらすのか、それは誰にもわからない。

プロローグ

思わず取り落としたビニール袋が軽い音を立て、晶は自分が——どれくらいの時間かはわからないが呆然としていたことによつやぐ気が付いた。

目の前に広がっているのは、見慣れたはずの自宅周辺の風景ではなかった。

そこにあつたのは鬱蒼とした木々の連なりであり、鼻を刺激するのは濃密な樹木と土の香りであり、時折吹く風が木々の梢を揺らす音。端的に言うならば、東西南北もわからない深い森の中。

が、彼が借りている賃貸アパートの周辺には記憶をたどつてもこんな濃密な森林などなかったはずであるし、そもそも普通に道路を歩いていただけでこんな場所に普段着のまま迷い込むわけがない。明らかに普通ではない異常な事態であり、そしてそれは周辺の環境ではなく晶の身体にももたらされていた。

「……、……！？」

呆然として、だからこそ何事かを呟こうとして無意識に唇を動かした晶は、今度は己の身体に起きている異変の一つに気が付いた。

——声が………出ない！？

思わずその両手で喉を抑え、それから今度はゆっくりととりあえず50音を唱えてみようとかやや腹に力を入れてから口を開く。

しかしやはり喉から声が出ることはなかった。

僅かばかりに出てくるのは、帯を震わせることのできなかった肺からの呼気が起こすささやかな風の音だけであり、何らかの意味を成す言葉も何の意味も持たない単なる叫びもついに形を成すことはなくそして……晶は己の身体に起こった異変が声だけでないことによくやく気が付いた。

——おれの手じゃ……ない？

最初に気が付いた箇所は声を出そうとし続け、思わず急き込んでしまい、涙を目元に浮かべつつ口元を押さえることになった自らの両手だった。

まるで丈のあっていないぶかぶかのダウンジャケットからちよこんと飛び出している色白で、華奢で、可愛い指先。

それは、いくらデスクワークが中心であり身体を動かすのが得意ではないとはいえども成人した男性である晶の手では断じてない。

呆然としていた時間は、この森の中にいると気が付いた時よりも長かったのか短かったのか。

慌ててジャケットを脱いだ拍子に自分の頬をなでるのは、しばらく床屋に行く暇がなかったせいでやや長めになっていたとはいえ、腰まで届くほど長かったわけなどなく。

その自らの身体の異変に慄きながらも晶は半ば機械的に自分の身体を目で追い、小さくなった掌で触れながら確認していく。

明らかにだぶだぶになっているシャツとその上に着込んでいたスウェット。ゴムのおかげで腰の部分でかろうじて引っかかっているだけの同じくスウェットパンツ。締め付けが緩くなったせいで足首までずり落ちている靴下と明らかにサイズの合っていない靴。そし

て……

股間を押さえる掌には、あるべきはずのものの感触がない。

——女の……身体だって？

一周してようやく落ち着いたのか、あまりの事態に精神が摩耗したのか、晶は平板な調子で呟く。もっともそれが言葉になることはなかったわけであるが。

ガサリ

背後から何者かが下生えを踏みしめる音が響いた。

ブログ（後書き）

初投稿になりますのでばちばち修正をしながら続けていく予定です。
当面の目標は週2回更新……できるといいなあ。

？・獣と餌（前書き）

2012/01/13：サブタイトル修正

？・獣と餌

どことも知れない森の中から、晶が聞いたこともない不吉な調子を伴った獣のような鳥のような叫びが一つ、響き渡る。

それが収まると再び、まるで何かを確かめるかのようにもう一度、今度は小枝が折れる音がやけに軽い調子で晶の耳朵を打った。

「……！！！！？」

恐る恐る振り返った晶の前にあったのは巨大な——巨大な獣の姿だった。

それは恐らく……多分間違いなく狼なのだろう。少なくともイヌ科の生物であることは間違いない……と晶は思う。たとえその大きさが那須高原で見た牛よりも大きかったとしても。

無論そんな巨大な狼など晶は見たことなどない。

晶自身が見たことがある狼はTVの向こう側の映像であり、動物園の織の向こうにいるそれだけである。それでもこんな巨大な狼は晶の知る世界には存在していないし、記録があったとしてもそれこそジエヴォーダンの魔狼のような半ばおとぎ話のようなそれのようなものしかない。

あまりといえばあまりの事態に晶は目の前の巨大な生物を呆然と見上げ、獣の瞳を覗き込んでしまいそして、その場にへたり込んでしまった。

——自分は今、この獣の餌になるしかない

獣の瞳から放たれていたのは人間のそれとはまったく次元を異にした、そしてそれ故にどこまでも純粹で強烈な殺意。目の前の獲物を襲い喰らい自らの血肉に変えるという限りなく透明な野生の決意。

何をどうやっても逃げることはかなわない。

どういった理由や理屈、はたまた偶然が作用したのかはわからないが、少女になってしまっている今では……おそらく男の姿のままでも。

低くなってしまった視線の先にいる獣は無力な農奴を戯れに蹴る貴族のような、むしろゆったりとした足取りで晶にその身を寄せてくる。

その口元からだらだらと涎を垂らしながら。僅かばかりに興奮しているのか生臭い息を漏らしながら。

——まさかこんな風に死ぬなんて思ってもいなかった……

晶は近づいてくる死神の体現のような巨大な狼をぼんやりと眺めながら、心の中で呟き、同時に祖父が亡くなった時の光景を思い出す。

最後の時は病院のベッドの上であつたが、両親と自分と妹。それから近隣に住んでいた幾人かの兄弟と親戚に見守られながらの、大往生というのにふさわしい安らかな死であつた。

——俺も爺ちゃんみたいなの、いつかあんな風に死ねるといいなと思つてたのにな……

しかし今目前に迫っている死は、そんなとりとめのない夢想とは

正反対。見知らぬ森の中で、自分が自分であると示す身体はおおよそ信じられないそれになってしまい、見守るものもなく獣の餌となるような死。

知らないうちに両目からとめどなく涙があふれかえり、不意に股間が熱い液体でびしょびしょになる。

かすかに漂うアンモニア臭と、急速に広がる下半身の不快感に眉を顰め、こんな状況下で不快感を覚える自分の精神に思わず苦笑いを浮かべた時、どこから小さな風を切る音が響いた。

？・獣と餌（後書き）

R15 指定するの忘れてた…

ジエヴォーダンの狼は18世紀半ばにフランスに現れた狼？で詳しくはWikiでとりたいところなんですが、あれに乗ってない解釈も書籍であつたりするのでそこらへんは自己追跡してください。
一応ファンタジーなんで狼王口ボよりもこちらを引用してみました。

？・死の光景（前書き）

2012/01/13：サブタイトル修正：改行の修正

？・死の光景

それはほぼ同時に起こった。

右手前方から聞こえた小さな風切音に晶が耳をピクリと震わせ、弾かれたように狼が跳躍しようとして果たせず、その巨大な左後頭部に一本の矢が突き立つ。

直後、このどれだけの広さがあるのかも分からない森の隅々まで届くような、雷鳴のような咆哮がその罅から吐き出され空間を震わせる。その、あまりにも激しい怒りの色に染まった轟音に、晶は咄嗟には両耳を押さえきつく目を閉じて体を縮こまらせた。

直後ビシャビシャと音を立てて晶の小さな身体に降りかかってくる生暖かい液体は、狂乱の叫びをあげる狼の罅から吐き散らされる唾液か、それとも別の何かなのか。

——なんなんだよこれ！なんなんだよもう！

形を成さない叫びをあげ、固く目を閉じ耳を押さえ震える晶の傍らに何者かが走りこんでくるような音が響き、金属同士が打ち合わさるような奇妙に清涼な音が耳を押さええる両手をすり抜けて晶の耳朶を打つ。

そこからはもう、嵐のような振動と騒音の大合奏だった。

そして晶自身にその嵐に抗う術は一つもない。

ただその場に蹲り、今この状況に置かれている自身の不運。自分の事などまるで眼中にないかのように命のやり取りをしている獣とその相手。自分をこんな場所に導いた何か。

それらもろもろに対しての呪詛をその役に立たない唇から零し、その数倍の罵倒を脳内で晶は繰り返す。

——早く終われ！なんでもいいから早く終わってくれっ！……これが夢なら……！悪い夢なら……早く覚めてくれよ……！

そんな呪詛と祈りを繰り返し、きつく目を閉じ耳を塞ぎ蹲る晶に獣とその相手がどういった戦いを繰り返しているのかはわからない。かろうじてわかるのは、お互いのたった一つの命を掛け金とした戦いがその過程で引き起こす闘争の不協和音のみ。

悪魔のような狼の咆哮、固いものと柔らかいものをぶつかり合わせたような鈍い音、何かを引きちぎるかのような気味の悪い音、不吉な音色を奏でる獣や鳥の合唱。どちらの身体から迸ったものか生ぬるい……恐らく血液が晶の身体にも飛び散り、その気持ちの悪い感触にも晶は体を震わせる。

限界を超える緊張から晶の身体は再び自分の身体から排出された生暖かいもので汚され、その一つ一つが、晶の精神を少しづつ削り取っていく。その過程で再び晶は自分の下半身が生ぬるいもので汚れるのに気が付いたが、そのことに心を振り向ける……獣に餌と見定められ、絶望的な死を自覚したあの時にあつた僅かばかりの余裕もなく。

それ故、晶は嵐が終わったことにしばらく気が付かなかった。

「……？」

恐る恐る手を放した耳が捉えたのは、風が揺らす葉擦れの音、遠くから聞こえてくるとことなく愛くるしさを感じる優しい何らかの生き物の鳴き声。そんな優しい音の中に混ざる場違いな激しい息遣い。

しかしその呼吸音も段々と落ち着いたものになり、最後に大きく息が吐き出されて静かになり……

「大丈夫だったか？」

晶の耳に届いたのはやや気遣わしげな、よく響く男の声でありそして晶にも意味の通じる言葉だった。

——…っ！？

晶は自分の耳を疑った。英語ですらろくに聞き取ることのできない晶にとって、意味の分かる言葉は日本語しかない。しかし……そんなことがあるのだろうか？ あんな巨大な獣の姿を見てしまったというのに？

——…日本語……？ でも、なんで？ ここは日本？ 日本にあんな化け物がある土地がある？ けどでも……ええっ！？

あまりにも現実離れすぎる状況が続いた末に、届けられたありふれた言葉。それ故に晶は混乱し、それ故にそこにあるものを想像することができないまま男の声が聞こえてきた方に顔を向け……その凄惨な光景を視界に収めてしまう。

獣と男という二つの生き物が闘った結果が存在するその方向に。

4本あった足のうち2本を切り飛ばされ、倒れ伏している狼の腹は斜めに切り開かれ、黄色い脂肪のこびりついた赤く、黄色く、ピンク色の内臓がいまだに湯気を立てている鮮血のテーブルクロスの上に陳列されている。

今の自分の身体くらいの大きさの巨大な頭部の半分は抉られ、つ

ぶされており、灰色がったピンク色の脳が、眼窩から飛び出しているつややかな眼球とともに震えているのが見える。

呆然としたまま、晶は先刻まで自分を餌にしようとしていた獣をしばらく見つめ続け、……そしてその傍らにいた男にようやく気が付いた。

獣からほとばしったものだろう。その手には血にまみれた真つ赤な剣を握り、その半身を真つ赤に染め上げた男に。

命が助かったことで気が緩んだのか、鼻を突く生臭い血の匂いに酔ったのか、悪鬼もかくやという凄惨な男の姿に恐怖を覚えたのか。

それともそれらすべてが理由であったのか。

男がその血まみれでさえなければ恐らく魅力的に映るのだろう微笑みを浮かべるのを見たところで、まるで発条の切れたおもちゃのように晶はそのまま意識を手放した。

？・死の光景（後書き）

とりあえず晶君のトラウマになりそうな出来事はここで一旦終了。
今後もしろんなトラウマ事件は出てくる予定ですが。

かわいい主人公はいじめられて何ほです……よね？

？・男と妖精種（前書き）

2012/01/13：段落の微調整・サブタイトル変更

？・男と妖精種

背後から迫る獣の息遣い。

その息遣いに追い立てられながら晶は深夜の住宅街を走り続ける。どうして追われているのか、何か自分の身に大変なことが起こりそれが原因で追いかけている気がするのだがうまく思い出せない。走っている途中で履いていたサンダルは脱げてしまい、靴下だけで冷たいアスファルトの道を走らなければならなくなったことにも晶は眉をひそめる。

道路自体は舗装されているから走りにくいわけではないが、それでも時折小さな指先ほどの石のかけらを踏んでしまいそのたびに走る激痛が、疲労とともに晶から逃走するための気力を少しずつ奪って行ってしまう。

「誰か……っ！誰か助けっ……！！」

呼吸すら満足にできなくなりそうな状況下で、情けなくもまるで年端のいかない少女のような涙声でどれだけ繰り返したかわからない助けを求める叫びを再び上げるが、塀や垣根、フェンスの向こう側にある様々な建物から反応が返ってくることはやはりない。

——……っ！？

不意に何かに足を取られ、走った勢いのまま草むらに倒れこんでしまった。その時どこかにぶつけたのか、手足を覆う肌理細かな白い肌のそこここが血で滲み、あるいは青く、赤く腫れ上がってしまったっている。

しかし今はそんなことを気にしている場合ではない。早く逃げな

ければ、もしも追いつかれたなら今度こそ喰われてしまう。

そう思い、腰まで届きそうな長い髪を垂らす頭を何度か振って碎けそうな気力を何とか振り絞って再び走り出そうとした瞬間……目の前にそれはあった。

自分の事を喰らおうとする巨大な狼の頭。一度死んだはずなのに晶の事をあきらめきれなかったのか、ピンクがかった灰色のつぶれた脳みそを震わせ、右の眼窩から垂れ下がった眼球に喜びの色を浮かべて、涎をだらだらとたらしながら、逃げることも忘れその場に腰を落としてしまった晶のもとへゆつくりと近づいてくる。

「……」

絶望の果てゆえにか、晶の喉はついに声を発する力すら奪われてしまったようだ。本人は気が付かないまま意味のある罵倒と意味のない呪詛を音のないまま、いつそ可憐といってよい口元から獣だったものにひたすら投げつけ続ける。

無論そんなもので獣の歩みが止まるわけではない。

ひどくゆつくりと晶のそばにやってきた狼は見せつけるように、恐怖をあおろうとするかのようににだらと涎とどす黒い血を流しながら、上顎の半分が崩された醜悪で巨大な顎を大きく広げ……いきなりその巨大な頭部がまるで風船のように粉碎される。

その唐突な展開に、吹き出す狼の気色悪い血流を避けることもできないまま呆然とその頭の向こうに視線を巡らせそして……

目を大きく見開いた晶は、自分の身体がうまく動かないことに気が付いた。が、別に何らかの手段で拘束されているわけではない。ただ悪夢の内容がひどすぎて全身がひどく緊張していたせいだろうと自分で無理やり納得する。

その証拠に全身は熱を持ち、実際に心臓はものすごい勢いで脈打っているというのに、体の奥底は不気味に冷え切っている感じで毛布をぎゅっと握っている自分の両手すら思うように動かすことができない。

——…毛布？

そんなものを抱えたまま外出する人間などいるのだろうか？少なくともコンビ二に買い出しに行くためにそんなものを抱えていく人間はいないし、少なくとも自分は……

「気が付いたのか？」

手に握った毛布の裾を、眉を潜めて見つめていた晶の耳に、低くよく通る男の声が届いた。

慌ててそちらを見ると、こちらに背中を向けたまま……パチパチと何かがはぜる音がするということは焚火の前で何か作業をしているのだろうか？男は振り向きもしないまま言葉を続ける。

「はぐれ」ならもう始末した。お前を囷にするような形になってしまったが……あそこから少し離れているがこの辺りはまだやつがねぐらにしていたあたりだから、一晩くらいはとりあえず安全だろ

う」

だから今日はこのまま野営をして、明日になったらここから3日ほどある——今回の討伐依頼をしてきた村に向かおうと、男は少女に告げる。

その言葉に晶は少しばかり眉を顰め、空を見上げた。木々のせいで太陽を直接見ることはできないが、まだ周りは明るいといって差し支えない。

——今から焚火を始めるとか、薪になるものがもつたいない気がするんだけど……

そんな晶の疑問を雰囲気だけで察したのか、男はクツクツと笑いを漏らし、やや呆れながら理由を告げる。

「日が落ちる速さは多分お前が思っているよりも早いぞ？そして一旦日が落ちたら人間は何もできない」

まあ、お前と同じ妖精種なら星明りだけでも動き回れるんだろうがな。

男はそう言うのと傍らに積んであった枯れ木を一本火にくべる。

男の台詞に少女は困惑の表情を浮かべた。男の言葉から考えると今の自分はただ小さい女の子になったただけではなく、人間とは別な種族……白人から見た黒人種や黄色人種のような存在に思われているらしい。

——けど、肌の色とかはそんなに変わらないような気がするんだ

よなあ。眼の色はわからないけど……ひょっとしてこの黒い髪がいないのか？

なんとなしに長く伸びた自分の髪の毛を一房つまみ、しげしげと眺めてみる。が、長さは確かに伸びたがそれは平均的日本人が生まれつきもっている色であり、それがどんなふうに問題になるのかは見当もつかない。

ひとしきり髪を弄り回していた晶は一つため息をつくと右手で髪をかきあげ……その途中で体の動作すべてを止めた。

ええつと？

髪をかきあげる途中で右手に触れたのは当然右耳……であるのだが、その感触がおかしい。

県大会準決勝がせいぜいだったが、小学校から高校まで続けた柔道と多少かじった柔術。大学に入ってからやめてしまったが、その練習のせいで自分の耳はかなり変形していたはずだ。

——けど、これっ変形っていうレベルじゃねーぞ！？

具体的には大きくなっている。詳細的にも大きくなっている。それはもうコントのできるマジシャンのあれよりも大きく、しかも上下に伸びているというよりも左右に突き出す感じで大きくなっているのは遺憾の限りであります。

あまりの事態にバカなことを脳内で口走ったことを晶はプルプルと首を左右に振ることでごまかし、小さくため息をついた。

確かにこれでは目の前の男と同種の人間であるとは言にくい。

——確か、亜人間とかいうんだっ たっ けか？

大学時代のサブカルチャーにやたら詳しい……まあ、重度なオタクであつた友人が時たま妙なことを織り交ぜつつ熱弁していた異世界やらファンタジーやらの定番種族らしいエルフとかドワーフとか？というそれらの種族的特徴の一つに大きな耳……とかいうのがあつたはずで、その扱いは作品ごとによつては人間の友人だつたり敵対してたりひどい場合は貴重な奴隷としての……売買対象だつたり……？

冷や汗が一つ、背筋に沿つて流れるのを感じた。

——いやいやいやいやそう判断するのは早計だと思つし、仮に人命の恩人だよ？狼さんのブランチになる予定だつた女の子を……命がけで助けてくれた人だよ？何の証拠もなしに恩人を不審者扱いするつてのは男としてどーよ？

どちらかという人間としてどうだろうかと言われそうではあるが。

女の子の部分で地味にダメージを受けつつ、晶は慌てて男の評価に上方修正を入れてみるがどうにも自己内男擁護チームは今一つ盛り上がらない。

何しろ少女の考えている懸念自体はある程度の妥当性は持つているからだ。

それであるが故に、そして直接的な生命の危機から脱出でき、余裕が持てるようになったおかげで逆に『この先に起こるかもしれない

い』出来事に思考を向ける余地が出来上がり……暗鬱な思考の海に知らないうちに飲み込まれそうになっていく。

それを留めたのは、鼻先に漂ってきたのはほんのり漂う甘い香りだった。

「ルパの実の搾り汁に蜂蜜を混ぜて温めたものだ。美味しいぞ？」

男はそついいながら、呆けたような表情で自分を見つめる少女に向かつて湯気を立てるクリーム色の飲み物の入った木製の器を差し出してくる。

けれどまあ、蜂蜜はもうないんでそれだけしか作れなかったんだが……ひよつとして苦手なものだったか？ いやまあ確かにルパの実そのものは食べたものじゃないのは知ってるが、搾り汁は十分飲めるといつか……あゝと、どこに行ってもこいつは子供なら喜んでくれたんだが……

段々と自信を失っていく男の言葉に晶は慌てて首を横に振ると、男の手から器を受け取り……言葉が出せないのしばらく瞳を泳がせた後、深々と頭を下げる。

その仕草に男は何とも言えない複雑な……得心がいったような、憐れむようなそんな表情を少女が頭を下げた時に一瞬だけ浮かべ、何事もなかったように言葉をつづけた。

「そいつは冷めると格段に味が落ちるからな。早く飲んでみな」

男の言葉に少女はじつと手の中の器を覗き込み、恐る恐る口を近づけ一口すすり……いきなり頭をあげてびっくりした表情のまま男

のことをじつと見つめてくる。

将来性満点な美貌の少女の猫のような、そして年相応に見える仕草に男は悪戯が成功したものの特有の笑顔を浮かべて見せた。

「美味いつて言ったる？さっさと飲んじまいな」

晶は男に向かってコクコクと頷きを繰り返すと器を傾けて、その熱さに時々顔をしかめながらゆっくりと、しかし一度も器から口を外すことなく飲み干していく。

わずかながら感じる酸味とかすかなイチゴのような香りが、男の言うルパの実の搾り汁なのだろう。それと蜂蜜の甘さが合わさっただけのシンプルな味なのだが、極度の緊張にさらされ続けてきたせいか、それを限りなく美味に感じてしまう。

あるいは子供に……少女の姿になったせいで味覚も変化したのかもしれない。

——うう……餌付けされてるみたいで癪だけれど……

ともかく、美味な甘味のせいでさっきまで抱いていた男に対するネガティブなイメージは段々と霧散してしまっている。最初は何らかの薬品でも混ぜられているんじゃないかと警戒していたというのに、

警戒した方がいい。した方がいいんじゃないかなー。しなくちゃダメかな？……メンドクサー

くらいの勢いで警戒感がグングンと目減りしていくのを、自分の中にある冷静な部分は警報を鳴らしているのだがそれは全く役に立たないままで。

まあ、何があっても死ぬよりはましなんだし。

飲み終わる頃にはある意味究極の現実逃避的結論に落ち着いてしまい、自分でも気が付かないうちに緩みきってしまった表情のまま満足そうな吐息を一つ、漏らした。

「ところでだ、一つ確認しておきたいんだが」

なんだか無駄に愛嬌を振舞いまくっている少女を和やかに眺めていた男は、気を取り直して少女に尋ねた。

「お前、言葉が喋れないのか？」

？・男と妖精種（後書き）

お正月？なにそれおいしいの？

な感じで年末年始を過ごしています。

結局三箇日休みなしなのは自分でもどうかと思いますが…

どうでもいいけどヒロインの相方^{になる}はずなのに男としか呼ばれない彼の名前は多分次回明らかになるはずですきつと

？・アキラ（前書き）

2012/01/13：サブタイトル修正：改行の調整

？・アクイラ

男の問いに、少女は一瞬狼狽したように視線を泳がせ、反射的に口を開こうとして……

それから諦めたような表情で小さく首肯した。

「そうか……それは生まれた時からか？」

フルフル

「つい最近になってからか？」

コクリ

「俺が……あの“はぐれ”と戦った後からか？」

……フルフル

「嘘がつけない性格のようだな」

4番目の質問の後の少女の仕草を見て、男は苦笑しつつそう言う。

一瞬思案するような表情になり、視線をそらせ、こっちをちらりと見た後頷こうとして、慌てて首を横に振る。

おそらく間違いなく少女は一瞬自分と“はぐれ”の戦いのせいで声を失ったということにして自分を庇護してくれることを求めようとして、途中でその行為に恥を感じて否定をした。そういうことなのだろう。

——ええ、その通りでございますよ

晶は、まるでやんちゃをした孫を見るおじいちゃんのような表情を浮かべている男の事をじっとりとした視線で見据えながら心の中で毒づいた。

自分が思わずとってしまった行動。それをどういう風に男が解釈したのか、同じ男である晶には手に取るようにわかる。

わからなかった方が精神的には楽だったかもしれないが。

「まあいい。とりあえず今日のところは休むことにしよう。詳しい話……質問は明日移動しながらでもいいだろう」

もう完全に日が落ちてきているしな。

男の言葉に少女は小首をかしげて見せる。

確かに大分薄暗くはなってきたが、まだ寝るには少し早いんじゃないのか？ 何か行動するのに支障はない程度には明るいはずなのに？

「さつきも言つたろう？ 人間は妖精種と違って訓練を積まないと夜目が聞かないんだ」

不思議そうな表情で自分を見つめる妖精種——明らかに古血統の特徴を体につづ目の前の少女にはわからないのだろう。

まあ、それは仕方がない。世界から愛される妖精種でも、世界を見るには自分の目を使っしかない。そしてその目が映す世界は、ど

こまで行っても自分以外にはわからない。

「もう月が出てきている」

そう言つて男は空に向けて指を指し、少女はその指先に従い空を見上げ、そこにあつたものを見て何とも言えない曖昧な微笑みを浮かべた。

——確かにここは、俺の知らない世界だ……

そこにあつたのは3つの月。

赤く輝く最も大きな下弦の半月、それよりもやや小さな蒼い満月。そして最も小さい白く柔らかな光を反射している上弦の三日月。

「特殊な訓練を積んだ……経験をつんだそうだったやつらなら何とかなるんだろうけれどな。俺のようなしがない剣士は魔法の加護でも貰わん限り、火の傍を離れて何かをするのは無理だ」

少女の表情をどう受け止めたのか。

男はそれだけ言つと、少女に背中を向けて座りなおした。それからおもむろに、少女一人くらいならすっぽり入りそうな背嚢をあけ、何やらごそごそと探りながら言葉をつなげる。

「先の事はともかく、俺は“はぐれ”のことを頼まれた村に戻り、そのの長に報告しに行かなくちゃならん。とりあえずその村までは一緒に来てもらつ」

来ないという選択はなしだ。お前、この森の中で一人で何とか生

きていくことなんかできないだろう？

男の言葉通り、晶にこの森で生きていく能力はかけらもない。特
技柔道程度の普通のサラリーマンがサバイバル技術などもっている
わけがない。

かといって、男の言葉に従うままでいいのだろうか？

多分、この男は自分に対してよからぬ考えを持っていない……と、
思う。というか持っていたらいろんな意味でまずいというか、ロリ
コンだったら死ぬ。そうじゃなければごめんなさい。

月を見上げながら晶はそんな殺伐としたことをぼんやり考えては
いるが、この男についていく以外にどうすればいいのか見当もつか
ない。

自分にはあまりにも選択肢……というよりも情報がなさ過ぎる。

ここがどこかもわからず、社会制度や人口や宗教………それどころ
か最も根源的な、何が食べられて、何が食べられないのか。そんな
ことすらわからない。

どこか大きな町や村まで行けば余剰な食料だってあるだろうが、
そもそも貨幣経済が成り立っていないければ、物資の購入だって容易
ではない。

もつとも、無一文なのでそこら辺を気にしても仕方がないのだろ
うけれども。

それに、目の前の男と明確に違う生き物であるらしい自分の身体
も……今後どうやって普通の人間と接すればいいのか。

言葉が話せないというコミュニケーション上のハンディがある上にこの状況はどんな罰ゲームかと、少女は項垂れて小さくため息をついた。

そんな少女の態度をどう思ったのか、何とも思っていないのか。目当てのものを取り出したのか、男は焚火の前で座りなおし、何やら手作業を開始する。

何かを切る音、釘を叩くような音が時々響き、その音の間に薪がはぜる音が静かに混ざる。

それがどれくらいの時間続いたのか。

「まあ、先の事はその時に考えればいい。とりあえず今日のところは寝ておけ」

その言葉の裏に何かがあるのかと晶は一瞬考え、そんなことを考えた自分に苦笑を浮かべると、男の言葉に従いその場で横になる、何はなくとも体力を回復しておくことは必要だ。

「ああ、これだけは寝る前に決めておいたほうがよかったな？」

男の問いに、横になった姿勢のまま少女は視線をその背中に向ける。

「いつまでもお前呼ばわりは不便で不自然だろう？せめて呼び名を決めときたいんだが？」

その言葉に晶は小さく頷いて見せる。その動作を気配だけで察し

た男は軽く肩をすくめて見せ、暫くの間聞きなれない単語をつぶやきあてもない、これはちよつと違つとぶつつぶつぶやき続けたあとで、少女の方を向いてひとつの名前を告げる

「安直だが、夜の娘>アーケイ＝ウィラーにあやかつて……縮めて“アクイラ”というのはどうだ？」

——そう言われてもな——

いいか、と問われてもこの世界の神話やら物語やらを知らない晶には何とも応えようがない。せいぜい元の名前と発音が近くて助かるくらいの感想しかないのだが。

首肯して見せた少女に対して男はほつとしたように息を漏らした。

「名付けたなら俺の名も教えないといけないな……俺の事はドウガと……呼べないんだつたな」

まあいい。とりあえず覚えておいてくれ。

「それじゃあお休み、アクイラ」

——おやすみ、ドウガ

ドウガの言葉に晶は心の中で返事を返し、瞳を閉じる。

この世界に本来の姿と全く違う容姿を与えられ、自分というものを認識した直後、命の危険にさらされ、声はなくとも叫びを上げ、初めてこの世界の食べ物を口にし、保護された人間から名前を与えられる。

ある意味この瞬間、晶はこの世界で生きていくことを許されたのかもしれない。母の胎内から生まれ落ちたあとに体験する出来事を、まるで儀式をこなすかのように体験したことによって。

？・アクイラ（後書き）

今回からサブタイトルつけることにしました。
主に自分用に

そしてようやく名前が出ました職業なぞのけんし
でも多分あんまり名前を使わない気がするのはまあ、晶が喋れない
せいですね。

誰だこんな設定にしたやつ。

一応後々話の中で説明があると思いますが、一部解説

>夜の娘<アーケイ＝ウィラー

白い月に住む夜と休息と再生を象徴する神エリオン＝メシスの娘。
安寧と眠りを象徴し、その父の権能の一部を受け継いでいることか
ら生と死も司ると言われている。
死に関しては安寧の中に含まれ、生は父の再生の中に含まれる。
外見は長い黒髪と黒い瞳をもった若い娘とされているが一部地域で
は妙齡の女性とも言われている。

一筆解説としてはこんな感じの神様です。作中で関わってくるこ
とは多分……ないといいなあ

？・考えること（前書き）

修正が思いのほか早く終わったんで思わず投入。
ストックが尽きるまでは毎日更新……どこまで続くかな

2012/01/08：段落がおかしいところと読みにくい部分を
若干修正

2012/01/13：サブタイトル修正

？・考えること

——自分が服着てるかどうかくらい気が付けよ俺……

赤い月と蒼い月は姿を消し、白い月だけが梢に引つかかるように輝いている明け方近く。

目を覚まして半分寝ぼけながら身を起こした少女に向けて、夜通し不寝番をしていたらしいドウガは少しだけ火の番を頼むと告げ、少女がぼんやりしつつもすっかり頷くのを確認してから横になった。そんな男をしばらく眺めていた晶は一つ大きな背伸びをし、立ち上がろうとして毛布を跳ね除け、その途端露わになった何も身に着けていない自分の姿に気が付いて数十秒。

晶は慌てて跳ね除けた毛布を体に巻きつけ、あまりにも幼い自分の身体に何らかの衝動を感じない正常な性癖であることをなんだかわからないうちに神に感謝し、そしてため息をついた。

——そりやまああれだけ血まみれだったはずなのに、血の臭いしなかったよな……

ともかくあらためて冷静になってみると、十歳くらいの少女の姿の自分というのは………なんと言っているのか、色々と難しい。

思い返してみれば昨日はほとんど動転しっぱなしで、自分の身体の変化に驚いたのはほんの少しの間だった。

——何しろ驚いた直後であれ………だったもんなあ………

普通に考えれば十分に非常に非常識な出来事ではあるのだが、何し

るその直後に発生したのは紛れもなく命の危機だった。冗談っぽく頭の中で呟いてみたがドウガの介入がなければ、自分はこのどことも知れない森の中で命を奪われ、あの獣の餌になっていたはずだ。

そうなった時の自分の姿を思い浮かべて、晶は小さく背中を震わせる。

ともあれそんな生命の危機から救われた直後だったせいなのだろう。今考えても意識を取り戻し、男と会話をして再び眠りにつくまでの間の自分はものすごく自分らしくなかったような気がする。

一応何を聞かされ、どんな反応をして何を考えていたのかは一通り覚えている。が、それらの一つ一つが妙にふわふわした感じで、どうにも現実感が足りない。

——あゝ……小學生のころの作文とかみつけて思わず読んじやつた時の気分だなこれ……

自分の部屋だったならじたばたしながらその辺をごろごろ転がっていたことだろう。モノが多いせいで実際にそんなことをしたら多分、埋まる。色々なものに。

そんなことはともかく。

いつまでもそんな風に自分の気持ちを持て余し続けるのもいいことではない。それはそれとして、割り切れないが割り切るか後回しにすることに決め、男が横になる前に着替えだと告げて傍らに置いたものを手に取った。

一つはいわゆる貫頭衣。弥生時代あたりの稲作とか高床式倉庫とかで描かれる農民ABCといった人物のイラストなんかでよく見る

あれである。

一枚の大きめの布の真ん中に頭を通せる穴をあけ（襟の部分は当て布がしてあった）両脇を縫い糸で止め、ボタンホールのような布に開けられた四つの穴を通された革紐は多分ベルト代わりのものだろう。

手触りは麻よりも滑らかではあるけれども綿ほど肌触りはよくない。

布の価値はよくわからないが、長さ二メートル幅六〇センチくらいの少しくすんだ白い布というのはどれほどの値段がするのだろうか？

自分のために使ってくれたということは、それほど高くないのだと思いたいところではあるのだが。

もう一つは革製のサンダル。

多分三枚か四枚の革を重ねて靴底を作り、指先が出ないようにつま先は加工され、足首で固定できるようにか太めの革紐と細めの革紐をつないだような少し長めのそれが踵の部分に取り付けられている、

——意外と……というかめっさ器用ですね……

古着を買う趣味もなく、何着かのスーツ以外の普段着は量販店のものを、着られなくなるまで着倒し、古くなったら捨てて買換えという現代日本人らしい生活をしていて晶に裁縫技術はほぼ皆無なので、多少不恰好でも服と履物を作れるというのはちょっとした驚きでもあった。

しかし驚いてばかりもいられない。

晶は毛布を足元に落として立ち上がり、スウェットを切るような感じで頭を通し、腰の革紐を締めてへその前あたりで結ぶ。

上から見ただけではよくわからなかったが、自分の胸はささやかながら膨らみを持つているらしく、男のころとは全く違うくすぐったさを晶は覚えたがとりあえず無視することに決めた。特にその一番敏感な部分は、気にしたら多分負けてしまうので。

サンダルの方は、むしろ何でこんな技術を持っているのかと思うくらいにぴったりだった。

踵の紐の根元部分を足首に二回巻き付け、その上をもう一度回す感じで細い紐を巻き付け脛の方で紐を結ぶ。少し歩いた感じでは特に違和感を感じないくらいによく自分の足にフィットしていて逆にちよつと引いてしまった事に関しては、ドウガに対して秘密にしておこうと晶は思った。

——で、これからどうするかだよなあ……

焚火が種火くらいの大きさになっているのに気が付いた晶は慌ててドウガに頼まれた仕事を思い出し、何本か小さめの枯枝をくべて火の勢いを大きくしてから太めの薪を3本ほどくべてから傍らに腰を下ろす。

——寝て起きたら全部夢でした……ならよかったのに

そう思ったが、新しい服と履物を身に着けたのにそんなことは毛布にくるまってる時に考えるべきだよな——と、思わず笑ってしまう。

目の前の焚火にかざすてのひらは、すべすべでぷにぷにで自分のものとはとても思えないのに自分の思った通りに動き、心地よい熱気を自分に伝えてくる。

子供……それも女の子になってしまい、その上目の前でまるで死んでいるかのように静かに微かな寝息を立てている男の言葉によれば、自分は“妖精種”という人間とは違った知的生命体らしい。

とりあえず三光年くらい譲ってそれ自体はまあいい。本当はよくないのだがいいことにしておく。妥協の範囲内と自分をごまかしておく。

現状一番の問題は声が出せないというその一点だった。

どういった原理か理屈か法則かは晶には全く見当がつかないが、とりあえず言葉はわかる。少なくともドウガが所属している国とか民族とか、そこら辺の会話を聞き取るのは可能だろう。

だから当面のところはドウガに引っ付いていけば生きていくことは可能になる……と思う。とりあえずすぐに生命の危機がどうこうとはならない……はず。

——見た目ごっついけどお人よしっぱいしな——

ひょっとしたら自分がこのまま大きくなったらいろいろと倫理的にあれな状況とか、おいでませ大人の世界へといったこともなきにしもあらずだが、その頃には色々覚悟が決まってるかもしれないし、決まっていなければ、まあその時考えよう……脱線しすぎだ。

考えても仕方がないはあるかな先の事はとりあえず棚上げにして、ドウガと引っ付いていかなかった場合を考えてみよう。

——まず、森から出られなくて死ぬかな——

考えるまでもなく死亡フラグである。しかもおそらく最大最短の。では森から出た後に別れたらどうなるのかと考えれば、やっぱりこっちもろくでもない未来しか思い浮かばない。

声が出せないということは、最低限の意志を他人に伝えることすらはなはだ困難ということだ。

たとえば治安がそれなりにいい街にいたとしよう。それでも犯罪は起こるだろう。現代日本だって痴漢から強盗、殺人まで軽重はあれ毎日どこかで犯罪が発生している。

仮に自分がそれらに偶然巻き込まれても、自分は助けを求める悲鳴を上げることすらできないのだ。

と、なるならばドウガから離れて行動するという選択肢は取れない。少なくとも自分の身体を自分で守れるくらいに強くなれない。ちは絶対に。

—— 厳しいってもんじゃないな——

ほとんど詰んでいるような状況ではあるが、晶は当面の大雑把な計画というか方針……のようなものを立ててみる。

とりあえず文字を書けるようになること。最低限の文字を覚えて筆談できるようになるだけで選択肢はかなり広がる。問題があるとすれば選択肢の幅が識字率の高低で極端に変化するといったところか。

…… 識字率高いといいなあ……

七割とか贅沢は言わないからせめて四割は維持してほしい。三割以下だと覚えるだけ無駄になりそうな感じだし。文字を書けるようになりました。読める人はいませんでしたでは笑い話にもならない。

晶は首を軽く振り、とりあえずネガティブ方向に行きがちな自分の考えをいったん強制的にリセットする。

あとは、ドウガも含めて人の話はよく聞くこと。自分には常識レベルの段階から情報がないし、自分が教えて欲しいものを他人に伝える術はほばない。

特に常識レベルの情報はこっちが意図してなんとか教えてもらうとしても、気が付いてさえもらえない可能性は高い。なにしろ常識……子供でも知っているのが当然の事なのだから……。よく見て、よく聞く以外に収集方法はないくらいに思っていた方がいいだろう。

そしてあとは、ドウガに引っ付き続けるために早急に何らかの有用な技能を身に着けるべき……。なのだろう。

——裁縫と料理くらいかな……。できることは

捨てられないように頑張らないと。捨てられたら死ぬしな多分。

そこまで方針を立てたうえで、晶は改めて考える。

——日本には帰れるのかなあ……

来られたのならば帰れるはずと、軽々しく考えることはできない。

友人のオタクから借りた何冊かの本にあったように、『何者かに召喚された』という事態ならばまだ帰還する方法について検討することができる。

呼び出す技術があるならば送り返す技術もあると考えられるし、なければ作るという試行錯誤もできる。ひよっとしたら魔王を倒せば自動的に送り返してくれるのかもしれない。

しかし自分のように……気が付いたらここにいたという場合は、どうすればいいのか？

それがどれだけ非常識なものであれ、自分が巻き込まれた事態がまっさらな自然現象のようなものだった場合……何をどうやって元の世界に帰ればいいのか、見当もつかない。

——……っ

一筋流れた涙を慌てて晶はぬぐい、晶は口元をきつく結び、目の前の炎を凝視する。

泣くのはまだ早い。

泣くのは本当に絶望した、その時が訪れてからでいい。

晶が改めて強くそう思った時、男が軽く身体を震わせて起き上がる。

いつの間にか白い月は完全に森の向こうに消え去り、太陽が木々の間から姿を現していた。

そんな朝日に包まれる森の中で晶は一つため息をつくと首を振り、

忘れていた懸念事項に対して思考を巡らせた。

——パンツが欲しいって言うのはどうやって伝えればいいんだろう？

外気が直接当たるといふ非常に落ち着かない腰回りの感触に閉口しながら。

まさか下着自体が存在しないってことは……ないよな？

？・考えること（後書き）

オチがのーぱんとか……疲れてるのかなスカリー

晶君独白と現状把握に努めるお話でした。

女の子になっちゃったのに驚ききる直後にあれですから。インパクトとしては肉体変化より命の危機ですので、晶君内部問題としてびつくり度が落ちてしまっているのは否めない今日この頃。

もうちょつといろいろ葛藤する前に覚悟決めさせられちゃった感じでしょうか

そして意外と器用ななぞのけんし

でも普通に一人旅とかしてるとそついうスキル上がりそうですよね？

しかし一向に先に進みませぬね……野営地から離れるのは次の次くらいになりそうです。多分

？・妖精と毒草（前書き）

2012/01/13：サブタイトル修正

？・妖精と毒草

「……さすがは“妖精種”といったところか」

ドウガはそう言うと、やや呆れたような……それ以上に厳しい光をその双眸に宿し、男に言われるまま目の前の野草の選別をしている少女を見つめていた。

きっかけは、朝の食事に用にと採取してきた何種類かの野草だった。焚火にかけた鍋の前でドウガの手で選り分けられるその野草の中にあった一本の、他のものとそっくりなそれを見た瞬間、晶の身体が硬直した。

あれを食べたら死ぬ。

脈絡もなくそう思った晶は反射的にドウガの腕をつかみ、片方の手でその野草を指差した。見ているだけでも気持ち悪くて顔を逸らしながら。

そんな少女の行動に訝しげな表情を浮かべ、指差されたその野草を手に取りしげしげと見つめそして、苦々しくドウガは呟いた。

「……馬鹿か俺は……」

何度か自分の事を罵倒する言葉を小さく呟いた後、男はふと少女の事を見つめ、頭を下げた。

「俺の不注意だった……まさかこんなところに生えているとは思わなかった……知っての通りこいつはもつと寒い地域にしか生えないはずで……」

いや……これは言い訳だな……

男はそう呟くと、少女に向かって頭を下げる。気が付かないままあれを鍋の中に入れていたら……“はぐれ”を討伐したのに毒草で行き倒れなど笑い話以外の何物でもない。

「ともかく助かった。あれを食べていたら完全にまずいことになっていた」

そう言って頭を下げる男に少女は慌てて両手を振り、ぶんぶんと頭を横に振る。何しろ先に助けられたのは自分の方だし、あれが毒のある草かどうかも判らないまま男にしがみついてしまったには完全に偶然の結果だ。

臭いか何かわからないが、とにかく気持ち悪くて反射的に行動してしまった結果、男に注意を促し男がその知識で毒であると判断したのだから。

「謙遜することはない。小さくてもさすがに妖精種だな。あれは特に見分けにくい種類の毒草だったんだが……」

称賛する男の言葉に焦ったように、少女は更に首を横に振る。

あれが毒であるとか、本来別の世界の住人である晶にそんな知識はもろろんない。

気持ち悪い。

ただそれだけの自分の直感というか、反射的な感情の発露でやったことであって、持ってもいない技能を持つていると誤解されるのは今後の事も考えればいろいろ問題がある。

そんな少女の必死なしぐさから何かを感じ取ったのだろう。男は僅かばかりに眉を顰めてから口を開いた。

「……ひょっとしてだが……あれが、毒草だとは知らなかった？」

男の言葉に少女は勢いよく何度も頭を縦に振る。

「なら、どうしてあれが危険なものだと分かった？」

その問いに、晶は自分でもちょっとこれはないよなーと思いつつ、可愛らしくコテンと小首を傾げる。言葉が使えない分どうしても判りやすい態度を示さなければならぬとはいえ……深く考えるとなんだか無性にジタバタ暴れたくなるので考えないようにする。

そんな晶の乙女心……ではないが微妙な葛藤を無視するか気が付かないままドウガは少女の態度に考えを巡らせ、そして真剣な表情を顔に張り付かせたまま立ち上がる。

「……確認させてもらいたいことがある。少し待っていてくれ」

自分が思ったよりもはるかに真剣そうな表情でそう告げる男に若干引きつつも、少女は小さく頭を縦に振る。それを確認すると男はおもむろに立ち上がり……しばらくして戻ってきたその腕の中には

様々な野草、果実、キノコが抱えられていた。

「こいつを食べられるものと、食べたら死ぬもの、そのどちらでもないものに分けてみてくれ」

目の前に積まれた雑多なそれらを眺め、それから男の顔を見た少女はその言葉にやや呆れたような、戸惑うような表情を見せる。が、男はとにかく勘でいいからと告げ、改めて少女に頭を下げる。

そんな男に押し切られるような形ではあったが、困惑した表情を浮かべつつも少女は一つ頷いて野草に視線を落とし、それから選り分ける作業を開始した。

これは気持ち悪い。

そう思ったものは手を触れるのも嫌だったので、そこから抜き取るような感じで食べられそうな何種類かのキノコ、食べても死なないけれども何かありそうな野草とキノコを選り分けて見せてから男の事を見上げ、これでいいのかと確認を取るように小首をかしげて見せる。

「……さすがは“妖精種”といったところか」

さっきと同じような、それでいて全く違う意味を込めた言葉を少女に聞こえないように、男は小さく洩らす。

少女の手つきは完全に素人のそれで、見分けるべき点を気にしている様子も……そういった判別方法があること、それに気が付いてすらいない。実に無造作に、それなのに目の前に積まれた植物の山から、男が言った通りに毒物を選り分けている。

“妖精種”は毒を見抜く……か

内心苦々しく思いながら、人間の間で伝わるその迷信をドウガは少女の手つきを見ながら心の中で呟いた。

それは遙かな神話の時代、自然と“闘う”道を選んだ人間とは違い、自然と“共に在る”道を選んだ妖精種に対するやっかみから出た言葉か、それとも人間の知らない薬草を数多く知るその知識の多さから生まれたのか。もしくは人間の五倍とも十倍ともいわれるその長命さに理由を与えたかったからか。

が、たとえその言葉が一旦としてその事実を備えていたとしても、それは『経験』や『知識』に裏打ちされた『技能』ではない。

事実数少なくはあるが、付き合ひのある妖精種の友人は薬草毒草に対する深い知識とそれを取り扱う巧みな技術でもって、毒を見抜いている。

しかし今、無造作に作業を終えた少女がやり遂げたことは……

注意しないといけないな……

自分の知る限り、完全に毒物を種類分けした少女を一瞥し、ドウガは頭を振り、自分に向けて自戒の言葉を漏らした。

この少女は毒物とそうでないもの、毒物の中でも致命的なもの、麻痺毒や睡眠毒のようなものを見分けることができる。恐らくただ直感のみで。

そんな御伽噺にしか存在しない能力は、現実には置いてはいつたっ

て破滅と悲劇をもたらす呼び子にしかない。

自分でも気を付けていなければ少女を道具のように扱ってしまうかもしれない。

「とりあえずアクイラ。今みたいな毒物の選別は俺が見ている前だけにしてくれ」

男の言葉に、その真剣な表情になぜか少女は両膝をたたみ、踵の上に尻を乗せるというあまり見ない座り方で姿勢を正し、男に真剣な表情を返した。

「妖精種の毒物判定能力に関して、人間の間には迷信じみた話が伝わっている」

少女の座り方に僅かに訝しげな表情を見せ、古血統に伝わる風習みたいなものかと思い直し、ドウガは言葉を続ける。

「……曰く、妖精種は毒を見抜き、毒を操る。薬草へ人を導き果実へ獣を誘う。見抜いた毒が人の手によるものならば相応の呪いを返し、その手で煎じた薬草は死者の目すら再び開ける……完全に御伽噺だが、年寄りなどはいまだ信じているものが多いし、そうでなくとも話くらいは聞いたことがあるというものは数多くいる」

実際のところ、俺の友人の妖精種はそんな話を笑い飛ばした。御伽噺だと。自分たちが毒を知るのは人より長い寿命のおかげで、人よりもそれを覚えるのに時間をかけられるからであると。

「しかしアクイラ。今の仕業は御伽噺のそれ、そのものだ」

その言葉に少女は一瞬目を見開き、男の表情を伺うと今度ははっ

きりと顔色を変え、困惑の表情を浮かべたまま再び男にしっかりと視線を合わせる。

その表情に何を感じたのか。

ドウガは一つ頷いてみせる。

「とりあえずわかる範囲の毒物の見分け方は俺が教える。それで足りない部分は俺の知人を紹介してやるからそこで学ぶんだ。それまでは……勘で毒物の判定ができることを知られない方がいい」

神妙な表情でしつかりと頷く少女を見て、ドウガは一つ息を吐き頭を振り、それからもう一度少女の事を見つめた。

「まずはその、反射的に毒物を避けるのを我慢する訓練から始めるか」

男の言葉に心底いやそうな表情を浮かべる少女を見て、ドウガは僅かばかり苦笑をしつつ心の中で呟いた。

意外と長い付き合いになりそう……か？

？・妖精と毒草（後書き）

晶君改めアキラのちーと能力が一つ解除されましたが、めっさびみよー

ちなみに人に見つかったらよくて首輪を付けられて権力者の生きる毒物判定生物として一生を終えるか、悪ければ実験材料ののち死んだら加工されて万能の解毒薬として売られてしまうような、そんな危険な能力です。

主に彼女の身の安全と平穏な生活的に考えて。

ちなみに暗闇視力は種族特性の一つなのでそんなに珍しい能力ではありませんというか人間以外の種族の基本能力です。

つまり人間が不器用なだけ？

なぞのけんしは妙なフラグを順調に立てている模様。

そしてついに次の更新で野営地を離れることに。

まあ、相変わらず森の中ですが。

？・踏破する行程（前書き）

2012/01/13：サブタイトル修正：段落の修正

？・踏破する行程

刃渡り五〇センチはありそうな、それだけでも十分武器になりそうな片刃の斧で、多くはないとはいえそれなりに繁茂している丈の高い下生えを刈り取りながら進むドウガの事を微妙に視界から外しつつ、晶は一つため息をついた。

——なんというか、あれはなあ……

晶の言うあれとは、まあいわゆる食べて飲んだ結果生ずる生理現象に関してだった。

この姿になってしまっただけの二回は、やってしまった結果に対する羞恥は感じるが、行為そのものは明確に意識できるだけの状況下になかったこともあって、欲求を覚えるまでは別段意識せずにいられた……というよりも逃避していた。

が、出発直前に感じた欲求はそれら逃避し、気が付かないようにしていた物事を強引に晶に突き付けてくるわけで。

それをしている最中に感じた喪失感と、開放感。汚れた股間を綺麗にしておけと置いていった器に入った水を見た瞬間の今まで感じたことがないくらいの羞恥と、それを使って言われた通りに股間を洗淨した時のやるせなさ。

仕方ないことだと頭では理解しているのだが……気持ちには理性のみで何とかできるものではない。

——ああもうやめやめっ！

少女は立ち止まるとかつて柔道の試合直前によくやっていたように、ペチペチと自分の頬を叩いて強引に気持ちを奮い立たせた。

どっちにしろこの身体でいる限り、ずっと付きまとう問題だ。割り切れなくとも慣れていくしかない。

アキラは瞳を上げ、自分が歩き出すのを待ってくれていたドウガの所へ、とりあえず自分が気持ちを切り替えたことを示そうと、あえてゆっくりと歩を進める。

そんな少女に対して男は何も言わないまま、そばまで来た時にポンポンと二回ほどその武骨な手で軽く少女の頭を叩き、再び藪やら低木やらを排除しつつ前進する作業を再開した。

——しかしこれは……すごいもんだなあ……

軽いため息をつきながら晶は目の前の男をしげしげと見つめなおした。

改めて男の後ろ姿を見ると、その力強さに晶は男として羨望と嫉妬を感じずにはいられない。

なんというか、かつていた日常から考えても、目の前で斧を振るう男の能力は規格外もいいところだった。

おそらく……五〇キロ以上はある背囊を背負い、胸と腹、太腿と腕に一部金属で補強した何枚も張り重ねた厚みのある革製の鎧をまとっている。

さらに、ぶつちやけた話金属の塊である剣を腰に吊るし、左腕には直径六〇センチはある木と革を重ね、金属板で補強した円形の盾

を装備し、腰に下げる剣よりも重そうに見える斧を振り、道なき森の中に道を切り開いていく職業謎の剣士。

——この世界の人間はみんなこんな感じなのか？

なにしろ晶の知っているこの人間はドウガのみである。あの男がこの世界での平均なのか、飛びぬけてすごいのか。考えたくもないがあれで最低レベルという可能性も捨てきれない。

晶自身確かにそれなりに鍛えてはいたし、普通の成人男子よりはよほど体力等に自信はあったのだが、こんな足場に悪いところで重量物を背負い、動作を制限する防具を身に着けたまま、斧を振るい続けるような馬鹿げた体力は持っていない。

恐らく三〇分もしたら完全に息が上がってしまっているのではないか？そんな作業を延々と二時間くらい続けている上、まだまだ余裕がありそうなドウガの様子はなんというか、言葉も出ない。

「疲れたか？」

思わず再び足を止めてしまったのに気が付いたドウガは斧を振るう手を止め、アクイラの方を見やる。と、少女は慌てて首を振りそして、照れ隠しなのか、少女はそっちこそどうなんだと、問いかけるように視線を向ける。

そんな微笑ましい少女の行動に、男は軽く肩をすくめて見せた。

「俺はまだ余裕はあるんでな。ま、腹も減ってきてることだし、後しばらくしたらトリアス川に出るからそこを渡った後に休憩にしよ
う」

——何で聞きたいことが分かったんだ？

「……お前は気持ちが悪く表情に出るからな。半日も見ていれば俺でなくとも大体わかるようになる」

男の返答に晶は不満そうに口をとがらせ、その表情にドウガは笑いを漏らし、伐採と前進の作業を再開する。

——まあ、表情を読んでもくれるのならコミュニケーションは格段にとりやすくなる……なるけれども。

何となく納得がいかないというか、具体的には悔しい。

朝の毒物判定の一件から、さらに男が自分に対して過保護度を上げたような、そんな気がしてならない。

確かに今の自分は見たとおりの小さな少女な上、出会ってから行動の一つ一つが果てしなく胡散臭い。そんなわけありの少女をエスコートする態度としては、男のそれはわからないものではない。そのことは頭では理解できるのだが……

気分的にはあまりいいものではない。

男の自分に対する態度に関してというより、自分と男の差を考えてしまうと何とも居心地が悪い気分になる。

果たして自分が同じような状況に巻き込まれたとき、男のような態度を維持できるのだろうか？

そんな男としての器の差を現在進行形で当事者として体験しているようなもので、しかも自分がドウガほどの包容力を持っていないということも、わかりたくないがわかってしまう状況はなんというか、へこむ。

——に、してもここが俺の知らない世界っていう雰囲気全然しないな――

また思考のダウンスパイラルに入り込みそうになった晶は頭を振り、視線を自分の周りに巡らせた。

昨夜は三つの月を見て、ここが自分の知らない世界であることを見せつけられた晶であったが、延々と続く代わり映えのないごく普通の森の木々の様子は、ここが異世界なのだという実感をどこまでも薄く引き伸ばしてしまう。

——視界にはどこまで行っても木、木、木……か。あ、鳥？

晶に植物というか樹木に関する知識があればまた違った感想になるのだろうが、当然そんな知識はなく、したがって感想としては少々藪の多い雑木林を延々と歩いている。それ以上の感慨を持ちようがない。

「この時期は森の中も比較的安定しているから……トリードの活動期とも少し外れているし」

ばっさばっさと豪快に斧を振るい、切り倒した蔦やら低木やらを踏み碎きながら男が再び声をかけてくる。

——……こっちも見ないで心を読むなよおっさん……トリードってなんだ？

男のあり得ないくらいの雰囲気を読む能力に呆れつつ、晶がなんだか生温い視線を向けるのと、いきなりドウガが大きく後ろ……ア

クイラの方に向かって勢いよく左足を踏み出したのはほぼ同時だった。

直後晶の頭上の梢ががさりと一度音を立て、事態についていけず硬直した晶の頭と梢の間の空間を、盾を垂直に立てたドウガの左腕が通過し、同時にぐちゃっという柔らかい物を叩き潰したような音が晶の耳に届く。

はっとして晶が男を見上げたが、ドウガはちらりと一瞥しただけで無言のまま視線を晶の右手方向、自分が殴り飛ばしたそれに向け、ゆっくりと歩きだす。

その男の進む先に恐る恐る視線を向けた晶が見たものは、なんだかうねうねとのたくり動いている長さ一・五メートル太さ五センチくらいの……端的に纏めると緑色をした巨大ミミズとしか言いようのない、どこか生理的嫌悪感をもたらす奇妙な生き物だった。口にあたる部分は持っていないのか、ただバタバタとその場で暴れるそれは一体何なのか。

その生物に対して男がどういった対処をするのか。なかば呆然としたまま男とそれを見つめていた少女は、直後に響いたそれを男が踏みつぶした、ぶちゅん、という音を耳にして反射的に肩をすくめて視線を逸らしてしまう。

そんな少女に気が付いていないのか、男は無造作に、ぶちゅんとか、ぐちゃんとかいうどうにも精神衛生上よろしくない音を何度も立て、まんべんなく丁寧に踏み潰す作業を当然の顔で終了させてから、男は晶に顔を向ける。

「こいつがトリードだが……なんだ、本当に見るのは初めてだったみたいだな？」

男の問いに、やや青ざめた表情で頷く少女の表情を見て、ドウガは少し考え込むように視線を地面に落とした。

トリードはある基本的にある程度の木々が繁茂する場所なら、この大陸のどんなところにも発芽する自力移動をする捕食植物の一種だ。

それだけにどんな辺境の住民でもその生態や姿形を知っている。何しろ一部の亜種は大陸北部の砂漠にすら適応して見せているのだ。ある意味生活に密着した生物と言ってよい。

だというのに目の前の少女はトリードの存在を知らなかった。

その事実と、朝方の一騒動で知った少女のあまりにも特異な能力。

「おおよそ考えられる場所のどこにでも現れる捕食植物の一種だ。大体の大きさは五メリンから三口イくらいだ。やたらと亜種がたくさんいるが、まあやることはどれもいつも一緒だな」

男が覚えた感情は、目の前にいない何者かに対する強烈な怒りと、少女に対する激しい憐みだった。

外の世界を見たことがなくらいに大事に育てられたのか、それとも何か理由があつて外界との接触を断たれていたのか……昨日見つけた時の状況を考えると、恐らく後者だ。

「こいつみたいに森の中で発芽する種類は森の中を歩いているといきなり降ってきて、下にいた生き物に絡み付いて絞殺し、表皮全体から消化液を出して獲物を溶かして表皮から吸収する」

よほど慌てて逃亡……もしくは連れ出されて来たせいだろう。少

女があの時身に纏っていたのはサイズが全然合わない男物の服で、
だというのを見たこともない素材、縫製で仕立て上げられた名職人
の一品だった。

「まあ、一部の亜種以外その表皮の硬さはエレイアの葉並に柔らか
い。きちんと刃物を身に着けていれば簡単に逃げる事ができる」

そして少女の無知ぶりから考えるに、外界との接触を完全に絶つ
ことができる権力なり財力なりを持つ、よほどの人物が密かに囲つ
ていたのだろ。そこから何者が……連れ出しその途中であの場
所の近くで行方をくらませた。おそらく追手との戦いにもなった
のか……

少女をどこに連れて行こうとしていこうとしていたのか知らない
が、少女を連れ出した方も、ろくでもない連中だったのかもしれない。

……少し考えすぎか。

男は踏み潰したトリードの死骸の方に顔を向け、声を出さずに小
さく笑った。

事実をもっと簡単で単純なことである場合の方が多い。裏を考え
ることも大事ではあるが、それは取れるはずの選択肢を自分で放棄
することにも容易につながる。

……俺も少しばかり動揺していたということか。

それだけ朝、少女が見せた異能は衝撃だったということなのだろ
う。

ともあれ、少女が何らかの厄介ごとに巻き込まれていることと、最低限の常識的な知識を持ち合わせていないことだけは間違いない。ならば自分が少女に対して為すべきことは、一人でも普通に生活できる程度に知識と経験を与え、ある程度の自衛する技術を教えること……か。

「適当な所でお前にも扱えそうな武器を見繕ってやる。最低限自分の身くらいは守れた方がいいだろう?」

男の言葉にアクイラはびっくりしたように目を見張らせ、それからひどく真剣な表情で大きく頷く。

その少女の表情に男は満足そうな笑みを浮かべると、少女のもとへ歩を進めると徐に膝をついた。そして、戸惑いの表情を浮かべる少女が動く前にその太腿に左腕を回して軽々と自分の肩の上に担ぎ上げてしまう。

「そうと決めたら、少し急ぐことにするぞ?」

恥ずかしさからか、少女は身じろぎするが男は構わずに少女の太腿を手のひらで軽く叩いて落ち着かせ、今まで以上に力強く地面を踏みしめ森を進みだした。

？・踏破する行程（後書き）

のっけから何書いてんだという展開ですが、フラグは回収という事で。あとはぱんつをどこで回収するかですか。ちなみに現在のーぱんつです。

色々悩み事ばかりが増えていくアキラですが、ドウガの方はいい感じにお父さんになりつつありますがこの先どうなることか。

そしてついに2体目のモンスター登場だったんですが、なんとか地味なことこの上ないですね……いいんです。雑魚大好きなんです……亜種の中には海竜を捕食するヤツもいるんですよ？多分出てきませんが。

以下、気になる方用の設定ですん。

長さの単位が出てきたので、気になる方用に長さの単位表を置いておきます。

1 エリル ≡ 2.8 センチ

10 エリル ≡ 1 メリン ≡ 28 センチ

100 エリル ≡ 10 メリン ≡ 1 ロイ ≡ 2.8 メートル

100 ロイ ≡ 1 カーデイ ≡ 280 メートル

100 カーデイ ≡ 1 ミル ≡ 2.8 キロ

最初は八進法にしようと思ってたんですが、想像しにくすぎるので断念。

まあ人間の指が五本ならどこに行っても一〇進法に落ち着くんだろ
うという事で。

ちなみに最小単位が2・8センチなのは、200年くらい昔に大陸
の半分を統一した王国のそれが基準になっているからで、制定時1
0歳だった第一王女の小指の長さを基準にしたからだとか。

？・二人の距離感（前書き）

本日のキーワード：“肉”と“魔法”

2012/01/09 誤字しゅうせー。こゝ指摘ありがとうございま
した！

2012/01/13：サブタイトル修正：段落の修正

？・二人の距離感

明確にいつごろ森を出たとは言えなかったが、気が付けば頭上を覆うほどの大きさの木々は姿を消していた。変わって視界に広がるのはまばらな低木と、膝程度の高さくらいの草が生い茂る半分草原になっていた。

歩いていた道も、森の中に刻まれたあるかないかの獣道から、少なくとも人の往来を感じるほどの小道に変わってくる。

そしてその小道が刻まれている草原も、二人が足を進めるにつれ段々と草の丈は低くなり、やがて小道から離れた場所に、どういった生物かはわからないが四足の家畜らしき動物の群れが遠く垣間見えるようになる。

——に、しても横の大きさの割に随分平べったい見かけしてるな
——……尻尾もやたらでかい気がするけど……

「あれは草食トカゲの一種だな。大陸でも一般的な家畜で卵と肉が取れる」

——なんですと!?

思ってもいなかった家畜の正体を知らせるドウガの解説に、少女は思わず男の顔を思い切り凝視し、男はそんなアキラの態度にクツクツと笑いを漏らす。

「何を驚いている？昨日も一昨日も干し肉を食っただろ？」

少女は何とも情けない表情を浮かべ、男は珍しく揶揄するような笑いを浮かべたまま言葉を続けた。

「鳥も魚も食べられるというのに、トカゲが食えない道理はないだろう？ あいつらは我らの日々の糧となってくれる生き物だ」

だから好き嫌いはいかん。

男にそうまで言われてしまうと少女が反論するのは難しい。なにしろこの三日間、少女の食生活を支えてきたのはドウガの持つ保存食と狩りの腕だったのだ。

ちなみに少女も一度だけ狩りを手伝おうとし——簡易なものだったが男に弓も作ってもらい——弓を引くこともできなかったので諦めた。

そのことを思い出し、押し黙ってしまった少女の頭をドウガはやや乱暴になでまわす。

「なに。それが美味しいものならばそのうち気にならなくなるだろうさ」

——まあ、そう言われればそうだけどさー……

実際に食べた干し肉はそう悪い味ではなかったことを思い出し、とりあえずこの件に関して“も”割り切ることにした。郷に入りては何とやら、である。

——ともかく、ここまで来たらもう少しなんだろう？

「ん？ そうだな……ここからならあと精霊が一回りするくらいだろう」

そんな少女の視線だけの問いかけを、男は正確に理解し、この世界特有の言い回しで村までどれくらいかかるのか答える。

——つまりあと三〇分くらい？で合ってたよな……？

あの、うねうねとうごめく気持ち悪い生物……トリードと遭遇した後から、男は積極的に自分に知識を与えてくれるようになった。

正直どんな考えを持って男がそうしてくれるのか、今一つ晶には理由がわからなかったが、ともかく教えてくれるのはありがたいので感謝だけはすることにした。

——子供とはいえ、一緒に行動する俺が常識知らずじゃ苦勞するだろうしな――

男から教えてもらったことは、二日前の朝約束してもらった通りの毒物と薬物についての一通り。この地域周辺の国と大まかな特色？のようなものあれこれ。危険度の高い生物、そうでない生物、植物を一通り。その他にも旅をする上で必要になりそうな技術をあれこれ。正直何でそんなに熱心なのかと少女が思っくらの勢いである。

——頭の性能は、昔よりよくなってるみたいだから何とかついていけるけど……

以前の自分なら、どれだけ丁寧にわかりやすく教えられても、半分以上は忘れてしまっているだろう。柔道の成績がそこそ良かったため推薦で大学には入れたが、中学高校と過ごした時代の成績の悪さには自信がある。

いくら必要に迫られているとはいえ、頭の中身が男のころと同じ性能だったなら、教えられたことをほぼ一度で、洩らすことなく、

すべて覚えるなどできるわけがない。

もつとも、そうであるからこそ“以前”と“今”は別の存在だと知らされるようで、その断絶がひどく気になってしまふのだが。

思わず零れ落ちそうなため息を、晶は慌てて飲み込み、気が付かないようにそつと傍らを歩く男の事を見上げる。

——正直、何でこんなに良くしてくれるんだろう？

手入れされていないやや長めのぼさぼさの金髪と、それよりも僅かに色の濃い、顔の下半分を覆う髭を生やしたこの屈強な体躯の大男に感謝していいわけではない。無力な自分に保護と、この世界で生きていく知識を与えてくれるのだから感謝してもしきれない。

だからこそ疑問に思ってしまうのだ。

こんな素性もわからない、“胡散臭い”“厄介そうな”自分に親切にしてくれるのか。

——考えても仕方ないか

晶は軽く頭を振って気持ちを切り替える。少なくともこの男は信用できる。いつの時点でそう判断したのかは晶自身にもよくわからないが、この男の傍らを歩くことは思ったよりも気持ちがいい。ほとんど超能力かと思う勢いでこちらの内心を察してくることだけはさすがに閉口してしまうが。

「さほど人の多い村でもないし、俺がいるから特に何かあるとは思えないが……“符”の使い方は忘れていないな？」

嫌な話題を口にする時の、少し疲れた口調で尋ねてくる声に、少女は思考を中断して小さくうなずき、それから少女は腰ひもに括り付けた……ドウガの手による革製の小さな箱型ベルトポーチ？とも呼ぶべき物を左手でそつと抑える。

そこに入っているのは、昨日護身用にと手渡されたA4用紙を半分にしたくらいの大きさの、不思議な文様と一定の書式で描かれた文字が躍る、数枚の種類の違う紙だった。

『本来なら口訣が必要なんだが、励起文を正確に心の中で辿り念じれば発動する』

昨日説明を受けた時の、男の言葉を思い出す。その分現象が発動する時間と威力は格段に落ちるらしいが、発動するまでは効果を完全に隠蔽できるし、一時的に怯ませたり無力化するには十分らしい。

尤も実際に“符”を行使したことはまだなかったので、どの程度の効果が出るのかは今ひとつわからなかったのだが。

——そんなことより、これのお蔭で色々知ることができたからな——
むしろその時点での晶の驚きは、その“符”と呼ばれるものを構成している素材について向けられていた。

障子紙ほど薄く洗練されてはいないが、やや指先に吸い付くようなその感触は、明らかに「和紙」だった。そして図形と何らかの文字は間違いなく「筆」で書き込まれていた。

この“符”が一般的なものかどうかはわからないが、少なくとも

筆記用具が存在することは確認できた。そして、何らかの『文字』が存在することも判った。

意思伝達の手段を色々考えていた少女にとって、この事実は何物にも代えがたい喜ばしい情報である。

――さすがに野宿の間に教えてもらうのは無理があるからな――

ここまでの道中で何度か口にした言葉を考えれば、男は自分の事をしばらくは手元に置くか、信用のできる知り合いに預けてくれるつもりらしいので、そんなに慌てて覚える必要もない。

そんな風に少女がのんきに考えてしまっていたのは、男の察しの良さに少しばかり依存してしまっているからなのだろう。本人は気が付いていないか……気が付いたらついたで否定したことだろう。顔を真っ赤にしながら。

「そろそろ見えてくるぞ」

男の声に視線を向けるとそこには、木で作られた不格好な二重の柵に囲まれた一〇軒ほどの家屋が立つ……晶の感覚では村というよりも集落といった感じの……村が姿を見せており。

少女はその見た目にも明るそうな、平和そうな村を見て、なぜか背中が震えるのを感じて訝しげに眉根を寄せた。

？・二人の距離感（後書き）

筆記用具キターー！！

これで晶くんかつる！！

……… すいませんちょっと調子に乘りました。

魔法の行使とか解説は多分今後の本編中でやらかす予定ですので割愛。

草食トカゲ君もそのうち美味しい料理になって出てくると思いますので期待しててください。

期待するポイントが激しく違ってるかもしれませんが。

しかし……… 主人公がずっとドウガに食われっぱなしのような気がしますが多分気のせいですね。 うん。

そして今さらですが感想とかがありましたら是非お願いします。

？・村長（前書き）

2012/01/13：サブタイトル修正

？・村長

——思った通り、小さいところだなー

少し離れた場所から村を見た時に抱いた感想を、晶は改めて繰り返し、小さく納得するように頷いた。

村の中央にあるのがまず井戸。それを囲むようにやや広めの広場さらにその周りを囲むように不規則に立てられた家の数は約一〇軒。そこから察するに、村の人口は四〇から五〇人程度だろうか？

森に近い側が草食トカゲの放牧場になっているらしいので、おそらくこちらからは見えない村の向こう側に、耕作地があるのだろう。

——……子供はいないのかな？

時刻は……判らないが、もう少しで夕刻になるだろう刻限だ。これだけ小さな村だからひよっとしたらいないのかもしれないし、もう家で大人しく過ごす時間なのかもしれない。

——……しかし、微妙に人の気配もないような……

「俺が村を出たときはもう少しにぎやかだったんだがな。まあ、聞いてみればわかるだろう。ちょうどあそこにこの村の長がいる」

そう言ってドウガが指差した先にいるのは、一人だけ身なりの良い恰好をした優男と、それを取り巻く数人の男たち。

——よかった。さすがにドウガみたいなのはここでも規格外なんだな。

視線の先にいる男たちは、晶から見てもごく普通の体格の者達ばかりだった。具体的には池袋でよく見かけるスーツ姿の男たちくらい……まあ、こちらの住人の方が多少は体格がよさそうではあるがそんな男たちの中の、一人だけ身なりのいい人物がドウガの言う村長なのだろう。他の住居よりも幾分立派な建物の前にいること。ほかの男たちに何か命令するような感じで指を指示しながら話をしていることから考えると、なのだが。

——あんな若い優男が村長？

「なんでも先代の孫らしい。依頼をうけた一週間前に本人から聞いた話では西の方の大きな町……ベルゲンスタインだからで商売をしようとしていたそうだが……」

——それ、失敗して逃げてきたんじゃないか？

微妙な目つきで少女は男を見上げ、男はその視線の意味を正確に理解し、声を殺した笑いをもらす。

「世の中の事は殆ど知らないくせに、どうしてそうも簡単に、世の中を動かす仕組みは察することが出来るんだ？」

——そっちこそ、どうしてそんなに簡単に俺の考えてることがわかるんだ？

「お偉いさんとの腹の探り合いなんか、昔は多くてな。これもまあ経験の賜物ってやつだが……とりあえずお前の表情と行動は一向わかりやすいのが最大の理由だな」

この三日の間で恒例になりつつある、無言の少女と男の掛け合いに気が付いたのか、村長らしい優男がこちらの方に視線を向けてくる。まずは大きく目立つドウガの方。そしてその横にいる少女に向けてられる視線。

その視線に少女の背中がゾワリと震える。

「これはこれはドウガ殿！お伺いしていた刻限よりもまだ大分早いお帰りでしたが、“はぐれ”の方は片が付いた……そう考えさせて頂いてよろしいのでしょうか？」

少女がその身を震わせてしまった理由に頭を巡らせている間に、優男はそう話しながら二人の傍へと、取り巻きの男たちを引き連れてやってきた。

その表情は男の帰還を喜び、依頼の首尾がどうなったのかに期待し、予定よりも早かったらしい帰還に訝しげな表情を浮かべた……演技を見せた。

——まあ、なんというか

先ほど一瞬感じた悪寒の理由を訝しみつつ、ほんのりと生温い視線で少女は男のことを眺める。

「森の導きもあつたのだろう。三日ほど前に遭遇し打ち取ってきた。待っている、今証拠の品を出す」

そんな優男の様子に気が付かない……いや、おそらく気が付いているのだろうが、無視しながらドウガは背囊を下し、その大きな入れ物中をまさぐり始める。

優男一人が話しかけてきたならばまだ、確信を持つほどの疑念を自分もドウガも感じなかっただろう。

だが、取り巻きの男たちの態度がいけない。全身から『なんでこんなに早く戻ってこれたんだ?』という困惑した雰囲気振りまいている。

——……あれ?なら戻ってくることで自体は予定のうちってことなんだよな?

ドウガが戻ってきたこと自体を疑問に思っている感じはしない。ならば困惑の理由は早すぎる、彼らにとって予定にない帰還にあるのではないか?

ドウガの帰還を早すぎると思う原因は?

——さすがに妄想過ぎるか——

ここの常識を自分は持ち合わせていない。大体のところは共感できる、とは思うのだが細かな所での感覚の差異は、その都度出くわすたびに感じ、覚えていくほかない。

「ところで随分村の中が寂しいようだが、俺が出た後でまた何かあったのか?」

目当てのものだったらしい布包みを取り出し、立ち上がったドウガがそう尋ねると、優男は心底申し訳なさそうに頭を下げる。

「申し訳ありません。あなたの力量を疑ったわけではありませんが、この村を治める者としては住人の安全確保が第一だと思ひまして」「どちらかに疎開させたということか……しかし、ここから一番近

い村でも西に三日はあるだろう？移動は大変ではなかったか？」

「それなんです、ドウガ殿が出られた二日後に東のエリアスタ公国から隊商がいらっしやいました。たまたま空き荷の馬車がありまして、女子供はそれに便乗させていただくことに」

「ほう……それは僥倖だったな。さて、これが証拠の品だ」

ドウガはそう言うと言みを広げ、ドウガの握った拳ほどの大きさの二本の白く尖った牙を披露した。その巨大さに優男を含める男達は息を呑み、少女は“あの瞬間”を思い出して表情を硬くし、ドウガはそんな少女の頭を労わるように軽く叩く。

「森林狼の“はぐれ”の牙だ。大物だったぞ？大きさは……そうさな高さは角竜、体長は七齡の草食トカゲほどはあったかな」

そのドウガの言葉に村の男たちはその巨大さを想像して身を震わせ、少女は初めて聞いた“角竜”という背の高い生き物がいることを想像して首をかしげる。

「それは……よく御無事で戻られましたね……しかもこれだけ早く……」

「なに、今回はこの娘が助けてくれたのでな。こちららも僥倖を得ていたわけだ」

その男の言葉に、優男は今さら気が付きましたという白々しい態度で少女に視線を送る。

——不自然すぎるっていうか、あからさますぎるんですけどー？

「これは……妖精種の方ですか……」

見ればわかるだろーという突っ込みを内心で入れつつ、まるで内気な少女であるかのように、晶はドウガの太腿にギュツとしがみつ き、そのまま半身を隠してみる。ついでに上目づかいで優男を見つ めてみるオプシヨンも付け……その自分のわざとらしいすぎる行動に 思わず赤面して俯いてしまう。

「理由はわからんが、森の中に置き去りにされていたらしくてな。 この娘を襲おうとしてねぐらから出てきた所を仕留めさせてもらっ たというわけだ」

「そうでしたか……いやしかし、こんな美しい娘をあの森の中に置 き去りですか……」

「まあ、それだけ厄介な理由でもあつたんだろうさ」

俺は関係ないとドウガは肩をすくめ、アキラはその言葉に不安 そうに体を震わせて見せる。

「そうでしたか……ならばこちらのお嬢さんは、お礼代わりに私ど もに預けさせていただけないでしょうか？」

優男の言葉に、ドウガは僅かに眉をひそめ言葉を促す。

「ドウガ殿はこれから南の方へ行かれるご予定とお伺いしております。その旅程にこれほど小さい子を連れて行くのはご負担でしょう かと思いましたので……せめてものお礼代わりということで私ども の村でお世話をさせていただければと思ひまして」

「ふむ……なるほどな……まあ少し考えておこう。置いていくにし る連れて行くにしろ、この娘と話をしなければならぬからな」
「それはごもつともですな」

ドウガの言葉に男は頷き、それから思い出したように顔を上げる。

「おお、そういうばもうこんな刻限ですな。“はぐれ”の脅威から村をお守りくださりありがとうございました。つきましてはささやかながら晚餐をご用意させていただこうかと思っっているのですが」「そうか……まあ遠慮するいわれはないな。頂かせてもらおう……この娘も相伴させてよろしいか?」

「もちろんですとも。それではこちらでお待ちください」

そう告げて優男は歩き出し、ドウガとアクイラの二人もそのあとに続く。

ずっと無言のままだった男の取り巻きの、なんとも言えない視線を背中に受けながら。

？・村長（後書き）

なんかドウガの察しの良さが超能力じみてきてますが仕様です。

そしてついに登場した主人公以外の知的生命体！
名前は多分出てきませんけどね！

以下気になる方向けへのちょっとした解説と一部設定です。

当初から出てくる”はぐれ”にですが、突然変異の異常個体の中で、特に人間に害をなすものと考えてください。

なので、あらゆる動物種の”はぐれ”がいます。

植物の”はぐれ”もいます。

更に異常個体なのでその大きさ等の特徴も個体ごとに違います。

同一種の”はぐれ”でもその大きさはかなり違ったりします。

なお、ある一定の大きさを超える個体は自重を支えるために、ある

種の魔法を自分にかけて続けていると考えられています。
あくまで推測しかなされていませんが。

戦闘能力は異常ですが、あくまでも野生動物です。

いわゆる魔法抵抗力が異常に強かったりしますが、野生動物です。

個体によつては一国を滅ぼしたりするらしいですが、野生動物です。

今後もしんな個体が出てくるかもしれません。

*ご意見感想お待ちします！

？・失ったもの、奪われたもの（前書き）

ちよつと今回グロ描写が入りますので、苦手な方は
o h o m e B a c k t

キーワード：新装備

2012/01/13：サブタイトル修正

？・失ったもの、奪われたもの

案内されたのは、家人のいなくなった一軒の家だった。

先ほど感じた男たちの視線は非常に不快なものだったのだが、ここにきて初めて見る人の住む建物に、晶は興味津々な様子で入り建物を見上げ、壁に触れてその質感に満足げな表情を浮かべ、最後に扉を開き……そして思わず固まった。

なんというか、住居の中はどこかで見たような日本の田舎の古い家屋のイメージそのものだった。

窓はガラスのない棒で固定する突き上げ窓で、周りを囲う壁は石と煉瓦つばいもので作られた、いかにも“らしい”物だったのに、引き戸……この時点でまあ何とも言えないのだが……中に入ると入口付近は四畳半程の広さの土間で、壁際には煙突を備えたかまどが据えられている。

その奥には大人が腰かけられるような高さの縁側があり、そこから一段高くなった場所が、居間にあたるのだろ。ご丁寧に今と縁側の間には木製の襖のような物が仕切りとして据えられている。

——ここまで日本ぽいなら畳くらいあったっていいのに……

居間にあたる部分は残念ながら板敷で、座布団替わりなのか、三枚ほどの円莫蔭が敷かれているだけだった。

なんとも中途半端な日本ぽさに、実に微妙な感想を抱いた晶だったが、一つ溜息をついただけで、サンダルを脱いで居間に上がりこむ。ドウガは荷物だけを下ろし、部屋に備えてあったランプを調べ、

オイルの有無を確認してから火をつけ、縁側に腰を掛けた。

「……で、あの露骨に怪しい態度をどう思う？」

莫座をつなげてその上でゴロゴロし始めた少女を、やや呆れた表情で見ながらドウガは尋ねた。

——どう思うも何もなあ……あいつら、完全に俺の事狙ってるよなあ……

奴隷売買というものがある程度の規模で行われていることは、すでにドウガから聞かされている。

自分という“妖精種”が高級奴隷として“加工される”……加工内容は恐らくろくでもないものなのだろうが……と、場合によっては小国なら国が傾くほどの価格がつけられることも……“価値の高い商品”になりうると、教えられてもいる。

あの、最後に感じた不快な視線は、自分の事を“商品”として見ていたそれだ。若干性的な目で見られていた雰囲気もあった気がしたが……考えると気味が悪いことこの上ないのでなかったことにする。ペドは死ぬ。

——しっかしなあ……いきなり俺みたいな“珍品”を目にしたからとはいえ、あんな露骨な態度取るようじゃ……あの男商才なんてないよなー。どっちかという……カモ？

「少なくとも、一人で店を切り盛りできそうな器ではなかったな。あれは」

ドウガの評価も同じようなものだった。

「たまたま来た隊商に、空き荷の馬車があるだって？東のエリアスタを出た後、ここに来るまでの間にめばしい村も街もない。多少は荷物は目減りするだろうが、空荷の馬車を二つも出すなど商人ならばありえん話だ」

この村で商品を仕入れる予定がなければな。

言外に含まれる色々な意味に対して、少女も同意するように寝転がったまま頷いて見せる。

その、ドウガの言う商品は恐らくまだ村の近辺で管理されている可能性がある。あの時、ドウガが村人の事を聞いた時、取り巻きの一人が不自然に視線を巡らせたことを、男も少女も見ている。

そこに村人がいるかどうかはわからないが、何らかの手がかりは掴めるだろう。

——しかしこれって、あんたが首を突っ込むことなのか？

ゴロゴロしながら晶は疑問を含んだ視線を送り、男は軽く肩をすくめて見せた。

「性分なんで仕方ない」

そう言うつと徐にドウガは立ち上がり、腰の剣を外して縁側に立て掛けると、代わりに背囊に括り付けた短刀を背中側のベルトに固定する。

「とりあえず、長に言って周囲の見回りをしてくるとしよう。晚餐前に腹を減らしておこうと思うしな」

軽い口調とは裏腹の真剣な表情を浮かべるドウガの、言外の言葉にしばし思案を巡らせた少女は、寝そべり足をパタパタさせながら肩越しに手を振って見せた。

「……残るのか？」

男と行動を別にする危険性の高さは少女にもよくわかっていたが、ドウガについていくには泣きたいくらいに体力がない。自分が付いていった場合ドウガが激しい散歩に費やす時間は下手をすれば五倍、一〇倍かかることになるだろうことは簡単に考えられる。

「……まあ、少なくとも怪我をしたり命を取られたりすることはないだろう」

それだけ言うと男はその巨体にもかかわらず、まったく物音を立てることなく建物からするりと抜けだし、夕闇の迫る外へと走りだした。

男が出て行った後、念のため戸締りをしっかりしてからしばらくの間、光源と言えばランプのみの薄暗い部屋の中、何もすることがない少女はひたすらごろごろしていた。

具体的には部屋の隅から隅までを目いっぱい使って。

その、ゴロゴロしている最中、ふと目が留まった小さな筆筭に少

女は思わず耳をピクリと震わせる。それからやや思案すつような表情を浮かべると、意を決したようにタンスに近づき……一つつばを飲み込むと、ゆっくりとその、一番下の引き出しを開けてみる。

そこにあつたのは……まさに少女が望んでやまないものだった

——パンツきたー！っつつつ！！！

そこにあつたのはまごうことなき女性用の下着だった。三角形の2枚の端切れと2本の紐で構成されたシンプルな、腰の横で紐で結ぶタイプの下着が一〇枚ほど、きれいに畳まれて仕舞われている。

少女は誰もいないはずなのに思わずきよろきよろとあたりを見回し、まるで危険物に手を伸ばすかのようにパンツに手を伸ばし、指が触れそうになった寸感思わずひっこめ……しかし勇気を出して、シンプルな白い下着を一枚その手につかんだ。

——……すみません頂きます！

心の中でこの下着の持ち主であろう名も知らぬ女性に平謝りしつつ、少女は羞恥心で顔を真っ赤にしながら、今の今までのーぱんつであつた下半身に、新たに手に入れた装備を装着する。

——久方ぶりのパンツー！！

男の時はトランクス派だったので、このぴったりとした下着の感触は何とも表現しづらいものだったが、今はその微妙な締め付け間も心地よい。

大げさだが、ようやく文明人に戻れたような……それくらい、下半身が無防備都市前言をしている状態は、不安で一杯だったのだと

改めて思う。

心の底から喜びの声を上げ、躍りだしそんな勢いで浮かれまくる少女……実際にくるくる回りだしたが。

少々喜びすぎの気もしないでもないが、何しろ外出時にはパンツを履くという……いやまあそうでなくとも一般人なら履いておいてしかるべきである……文化圏の出身者が、三日間も下着なしでいるというのがどれほどの苦痛かと考えれば、これはある意味当然の喜びであるともいえる。

中にはそんなこと関係なくノーパンツライフの方もいるかもしれないが、あまり一般的ではないので割愛。ご褒美な人の場合はお帰りいただくとして。

ともかくそんな、下着を身に着け下半身の不安から解放されたことで、ある意味この世界に来る以前の心理状態に戻ってしまったていたのかもしれない。

戸を叩く音を聞いただけで、外にいる人物がだれなのかを確認することを忘れるくらい無防備な状態に。

戸が開いた途端、すっかり日が暮れてしまった家の外から伸びてきたのは、少女が知らない男の腕だった。

それが一体なんなのかと認識するまもなくのばされた手は声の出せない少女の口を塞ぎ、それだけで非力な少女の動きを封じてしまう。

戸の向こうから現れたのはさっきの優男の取り巻きのうちの一人だった。やや血走った目に、だらしない笑いを張り付けた男は無言のまま後ろ手に戸を閉め、少女を板の間に放り投げた。

「……っ！」

板の間に叩きつけられた衝撃で、少女は無言の苦鳴を挙げ、その様子に男はいぶかしげな表情を、続けて獲物を狙う獣のような笑いをその顔に浮かべる。

「やけにおとなしいと思ったら、お嬢ちゃん口がきけねえのか」

そのセリフに少女はぎつと男を睨みつけ、男はその視線が気に入らなかったのか板の間に足をかけ、少女の腹を蹴り飛ばす

——……っ！……なにしゃがるっ！

派手に吹っ飛ばされ、壁に激突したせいでくらくらする頭を振り、蹴られたせいで痛みと吐き気を覚えた腹を押さえつつもう一度男を睨みつけ……そんな少女の必死の表情を見て男はにやにやといやらしい笑いを浮かべて口を開いた。

「まさか一人になってくれるとは思わなかったからな……安心しろよ。“妖精種”なら傷物でも高く売れる……というより傷物じゃないと、高くなりすぎて売れないんだ」

——……？

「まあ、知らねえよなあ……“妖精種”はわざわざ傷物に加工してから売るんだよ。処女の妖精種なんざ希少度高すぎて逆に買い手がつかないからな……なら、価値を下げちまえばいい。で、その宝石に傷をつける役目をもらったのが俺ってわけだ」

その言葉が終わると同時に男の手が伸び、反射的に少女は転がってその手をよける。そんな少女の反応が楽しいのか、男はゆっくりとなぶるように少女に手を伸ばすことを繰り返す。

——傷物って……何？俺、犯される？男なのに、男に？こんなに小さい身体なのに？

晶は混乱したまま、自分でもよくわからない恐怖でうまく動かない体を必死に操り、男の手から逃れ続ける。

訳が分からなかった……いや、頭ではそういうことがあるかもしれないと、覚悟していたつもりだった。しかしそれが、いつたいういうことなのかを、本当は理解しきれていなかったことによりやうきが付く。

男のなぶるような態度が嫌だった。

こんな子供の身体を性の対象として見ているその視線が嫌だった。そのいやらしく歪んだ、涎まで垂らしている口元には吐き気がする。

そして、そんな男に性の対象にされて、ただ震えているだけの自分がたまらなく嫌だった。

「……！？」

「捕まえたぜ？」

ほんの一瞬、先ほど受けた衝撃のせい、足から力が抜け、男の腕が少女の腕を捕える。

「大人しくしとけばこれ以上痛い目を見なくても済むぜ？何しろお

前の保護者ももういなくなるんだしな」

——…なに？

「ま、そんなことはどうでもいいか」

そついうと男はベルト代わりの腰紐を解き、下半身をさらけ出す。

「あんまり力入れてると裂けちおふっ！？」

さらけ出されたそれを、少女はその細い足でできるだけ力で蹴り上げる。瞬間男の腕の力が緩み、その隙に何とか男から離れ……前を見ていなかったせいで土間に転がり落ちてしまう。

「……っのガキっ！優しくしてたら付け上がりやがって！！」

——優しくなんてしてないだろーがっ！

心の中で毒づき、おびえくみそうになる心を必死に奮い立たせ、少女は震える指先でポーチを開け、その中からドウガからもらった“符”を取り出し……出し切る前に男に捕まり捕まった状態で頬を張られる。

その衝撃で脳震盪をおこしそうになったが、気力を振り絞り、途切れそうになる意識を何とか繋ぎ止め……目を見開いたそこに男の顔が迫ってくる。

——…つつつつっ！！！！

唇が蹂躪される、そのおぞましい感触に少女の瞳から知らないうちに涙が溢れ出す。その様を見た男はニヤリと目元をゆがませ……

空いている右手で少女の服を強引に引き裂いた。それと同時に今度は反撃を受けないように巧みに足を少女の膝に乗せて押さえつけてくる。

——畜生！畜生！畜生！！

少女は必死に抗い、左腕だけはどうか自由を取り戻したがそれだけで男を何とかするには……

——……！？

“符”を取り出す途中だったポーチから、一枚だけ“符”が頭を覗かせている。

——……“雷の符”

それは本来の性能ならば敵を感電死させる威力を持つが、口訣なしで発動させた場合、全身を痙攣させる程度の衝撃を発生させる。そうドウガに教わっていた“符”だった。

——まだ……戦える……！

少女は気付かれないよう抵抗するように左腕で、胸をまさぐってくる男の右手を押し返すように力を入れ……それを鬱陶しく思った男に強引に払わせ、腕を引き戻す途中でポーチから“符”を引き抜く。

——我天地の狭間に揺蕩う数多の精霊に希い奉ら……

心の中で励起文を構築する途中、耳を食み、マーキングするかの

ように顔面一杯に舌を這わせていた男の舌が、自分の口の中に押し込まれ思わず中断してしまう。

その、ナメクジが口内を蠢くような吐き気を催す感触に強烈な吐き気を覚えたがそれを強引に抑え込み、再び励起文を読み上げる。目の前の男に感じる嫌悪と憎悪、それを上乘せするかのように。

——我天地の狭間に揺蕩う数多の精霊に希い奉らん！我前に在る敵を天より降る力にて撃ち滅ぼし給え！！

少女の心の中で響いた励起文が“符”に籠められ固定化、安定化されていた権能を解放寸前の状態にする。

——その権能“神鳴り”！！！！

励起文の終わりの句。権能の名称を心の中で絶叫し、ありったけの憎悪を込めて、少女は男の胸に“符”を押し付け……そして権能は発動する。

なぜかその本来の威力を解放して。

——……え？

目の前の男は絶叫していた。その声が音を成すことはなかったが。

目の前の男は青白く発光していた。否、青白く輝く光にその身を喰われていた。

全身が硬直し両腕は助けを高揚に頭上に高く掲げられている。その指先から爪が弾き飛び、光の圧力に耐えられなかったのか指

も四散する。髪の毛は逆立ち炎を上げ、大きく見開かれたその目、鼻、口からは沸騰した血液が噴出し、しかし辺りに飛び散る前に蒸発して只の塵となって男の周りを揺蕩う。

そしてそのうち全身が一回り膨らみ、その皮膚は黒い墨へと変化する、めくれあがりその内側の肉が姿を現しそれも真つ黒な墨に変わっていく。

それは、ほんの瞬き数回分のうちに起きた変化だった。

少女が気が付いた時には男は真つ黒な……人の形をした墨に変わっていた。

墨になりきれなかった部分は色鮮やかな生肉の色を所々で晒し、塵になりきれなかった種々雑多な体液が、男だった墨の各部からじゅわりと滲み出してくる。

——え……あ……死んで……？

ドウガから貰った“符”に人を殺す威力はなかったはずだ。ドウガが騙した？ いや、そんな必要ないだろう？ でもこいつは死んで……

「……つつ！？」

何が理由だったのか、特に損傷が酷い頭部の中で、なぜか一つだけきれいに残っていた眼球。

それは、今自分が陥っている状況を不思議に思っかの様に、少女に問いかけるかの様にランプの光を浴びて、ぬるりと輝き……

少女はその場で吐いた。

胃の中身を全てぶちまけ、涙と鼻水で顔中をぐしゃぐしゃにしな

がら吐いた。吐き過ぎて、激しく咳込み……。そこでようやく吐き気を飲み込んだが……。今度は得体のしれない倦怠感が少女の全身に広がっていく。

——人を……。殺した……

土間をはいずるように壁際まで移動し、なるべくあの“人だったモノ”を視界に収めないように……。壁に体を預ける。

悔しいと思った……。嫌悪感は酷かった……。吐き気がするほど気持ち悪かった……。殺してやろうと思うくらいの憎しみを覚えていた……

——でも、本当に殺すなんて……

未必の故意という言葉が脳裏をよぎるが……。自分はその時確かに殺意を覚えていた。死んでしまえと思いながら……。 “符”を使った。

乾いた笑いが口から……。漏れない。声を失っているから。

——神様……。俺が何かしたんですか……？

そう問いかけるが、ここは異世界だ。たとえ本当にいたとしても、自分の世界の神が出張してくることはないだろう。

……。どれくらいの間、少女は壁にその身体を預けていたのだろうか。

少女はゆっくりと立ち上がり……。へたり込みそうな足に力を籠めゆっくりと板の間に上がり、先ほど下着を失敬した筆筥の他の引き出しを開ける。

——本命は、ドウガの方だったんだ……俺はおまけというか、サプライズ扱いだったのかもしれない……

箆笥をあさりながら、晶は考える。

——もういなくなる……あれは恐らく、始末するという意味で使ったはずだ……

サイズの合わない服を何枚も取り出し、眉を顰めながら考える。

——多分……村人の失踪をドウガのせいにするつもりだ……村を襲い、村人をさらった盗賊団の一味とか何とかに……するつもりなんだろう……

考えすぎかもしれない。しかしその可能性も捨てきれない。

少女は自分の身長よりも大分大きい、上掛けのようなものを取り出すと身に纏った。

裾が長すぎる気がしたので、一度膝丈まで上げた位置で腰ひもで留め、だぶついた部分を押さえるようにもう一本の腰帯で留める。

髪も邪魔にならないように紐で丁度ポニーテールになるように纏め、毛先の部分も紐で束ねる。

それから再度土間に下り、ばらまいてしまった未使用の“符”を震える手で拾いポーチに入れ、腰紐に装着する。

そして、ドウガの使っている剣と盾をつかみ……その重さに盾を持つことは諦め、何とか剣だけを両腕で抱え、戸を開き、なぜだか笑い声を漏らしてしまった。

——こんなに物事の切り替えが早かったっけかな……？

昔の自分は、もう少しグダグダ悩んでいたような気がする。少なくとも人を殺したのだから、もっと悩んでもいいはずだ。だというのに……

思いを振り切るために軽く頭を振り、いまだふらつく身体を気力で奮い立たせ、少女は闇を見据える。

——いまは命の恩人を助けるべき時だ。

そして、少女は夜が支配する外へと一歩足を踏み出した。

夜の闇の中でも支障なく行動できる、この身体に初めて感謝しながら。

？・失ったもの、奪われたもの（後書き）

のーぱんつのフラグを回収しようとしたらなんかひどいことになってしまった……どうしてこうなった……

しかし、初の魔法行使の戦闘シーン……みたいなものやったんですが……地味っすね。

次回はドウガの立ち回りになるんですが、こっちも地味な魔法が炸裂しますぜ。

地味なのにどうやって炸裂するかは内緒です。
不発弾かもしれません。

*ご感想お待ちしておりますー

??・戦いの夜（前書き）

昨日投下分が少し長めだったんで、ちょっと短くなっちゃいました。

ご意見感想へのお返事は感想一覧の方でお返事してますのでよしなに〜

2012/01/13：サブタイトル修正

??・戦いの夜

「手際が良いのか悪いのか……」

ほんの僅かだが、追撃者から距離を取ったところでドウガは腰に下げていた幾つかのポーチの中から包帯を一つ取り出した。念のため強度を確認してから手早く短刀の柄に結び付ける。それから同じような細工をブーツに括り付けてあった太さ半エリル、長さ一メートルほどの投擲武器四本にも施していく。

夜間ではあるが、その手元にいささかの狂いもないのは頭上に輝く三つの光玉のせいである。

「夜戦の基本の一つとはいえ、三つも貼り付けるか」

遠方から射掛けられる矢が周囲に突き立ち始めるのを無視し、手早く作業を進めていく。

夜間の戦闘で敵対者が少数だった場合、取り逃がす場合も多く同士討ちの発生も予想されやすい。

そのための対策として用いられる方法の一つが、不審人物から七メリンほど頭上の空間に在り続けることを指定して、継続的に光を放つ“光玉”の魔法を括り付ける方法である。

この場合、対象が何らかの魔法的防御手段を持っていたとしても、その影響を受けることはまずない。“光玉”影響を与えているのは対象者の頭上の空間であり、その福次効果で対象者の姿が闇に浮かびあがっているだけなのだから。

だがこれは、個人の技量を頼みとする傭兵の取る方法ではない。傭兵ならば各々が夜間で戦える個人的な技量、技術をもっているは

ずで、持っていなければ早いうちに自分の命で技量不足を購うことになる。

なにより“符”は揃えるのに金がかかる。

つまりこれは、複数の専門職を抱え、ある程度の資金が用意でき、装備に金を回せる集団の取る手法である。

実際今相手をしている“敵”は戦術指南書の基本通り、三丁五人一組で、ドウガの事を追い立てている。剣と槍と弓で基本一組を作りそれに増兵されている感じである。

が、それはあまりにも教本通り過ぎる。

一組一組の……点と点の距離が広すぎる。他の組と連携できなければ線にならず、よほど注意していても、線が出来ていなければそこから逃げられてしまう。

……つまり正規の訓練はしているが、実戦経験はなし、という事か。

思っていたよりも事が大きくなりそうな嫌な予感にため息をつきつつ、細工をした短刀を頭上に投げ、柄から伸ばした包帯を器用に操り“光玉”を消し去る。

”天空から地に落ちた星の欠片から作られた刃物はあらゆる魔法を斬る”

あらゆるというのは誇張された表現だが、光玉や各種魔法の矢程度ならば消し去る程度の能力を持っている。魔法の矢を消し去るには、とんでもない技量も必要になってくるが。

「こいつを持ってきたのがよかったのか悪かったのか……」

一瞬にして暗闇を取り戻したのと同時に男はあらかじめ確認していた、最も人の多くいる方へと音をたてないように最大限注意しながら走り出す。暗闇の中を伝わってくるのは動揺した複数の気配が伝わり、直後森のあちこちで光玉が浮かび上がるが無論昼間ほどの明るさをもたらすことはない。

その慌て様にドウガは音もなく苦笑を漏らした。確かに教本通りだが……もう少しやりようがあることを、少し場馴れした人間ならいくか思いつける。それとも光玉を消されること自体は完全に想定外だったのか。

——別に星の欠片で作った短刀など、さほど珍しいものではないに……この辺りは確か、カレント男爵領だったか？

“はぐれ”を打ち取った“大森林”の南部一帯を治めるクロツサ
ン王国は大陸有数の国家であり、その版図は広い。が北部は“大森
林”と妖精種の帝国エルメ＝ナンドとの協定があり不可侵。東部に
接するのは有象無象の都市国家群で脅威になる国家は遙か東岸のセ
ジ＝ネージ藩王国くらいであり……つまりこの近辺ではここ数十年
戦らしいモノは起こっていない。

——実戦を経験する機会がなくとも、そこはどうかするのが領
主の才覚だろうに……

正面にいたのは五人。光玉に照らしだされるその姿……同系統の
竜革鎧を身に着けていることを考えると、やはりそういう事なのだ
ろう。

——男爵殿が奴隷商人の手引きか……いや、本人自らか？

ドウガは集団の側面に回り込みつつ、集団の正面を通過するように長さ3メートルほどの長さの包帯を括り付けた投擲武器を投げる。

……先代の評判はさほど悪くなかったんだが……

視界をよぎる、白くて長い不思議なものに集団の意識がそちらへ向いた瞬間、ドウガの素早い蹴り足が二人の男をまとめて吹き飛ばし、最も振り向くのが早かった男は振り下ろされた短刀の柄で鎧の上から鎖骨を碎かれ、最も反応の鈍かった二人はそれぞれ右と左の腕を掴まれた瞬間肘を逆方向に折られ、ついで倒れたところでそれぞれの膝を碎かれる。

「……い……賊はここだーっ！」

膝を碎かれた男の片割れが、激痛をこらえながら叫びを上げ、その声に他のものが反応を返す前にドウガは闇にその身を潜ませる。

……賊……ねえ

確かにこのまま少しずつ戦力をそぎ落としていけば、この場は制圧することが出来るだろう。しかしその後は？お尋ね者になるつもりはないし、たとえそうされてもどうにかできるくらいの伝手も多少はある。

……アクイラを置いてきたのは失敗だったか……

口のきけない妖精種の少女の事を思いながら、不用意に……手に

取るような怯えを見せながら集団から離れ、一人で歩いている兵の背後に音もなく近づいた。短刀の柄で防具の継ぎ目を狙い、正確に鎖骨を砕くと悶絶する兵士の装甲のない脇腹に手刀を叩きこんで意識を刈り取る。

黒髪黒目の妖精種の、恐らく古血統の少女。森の中の実にこまごまとしたことに驚き、話すことが出来なくともその表情で懸命に自分に問いかけてきた、知識がない割に人の機微や人の営みには空恐ろしいほどの理解を示す娘。

確かにあの娘をこの場につれてくることは無謀だったろうが、かといってあの場においてきたままでよかったのだろうか？

あの時はまだ、この地の領主まで一枚噛んでいる可能性まで考慮に入れていなかったとはいえ……

「出てきなさい傭兵ドウガ！あなたの連れの娘はこちらの手にあります！」

あの優男の長の声が、ドウガの耳に届いた。

??・戦いの夜（後書き）

寸法の表現が出てきたので寸法表再掲載。翻訳は丸投げ……

1 エリル〃2・8センチ

10 エリル〃1 メリン〃28センチ

100 エリル〃10 メリン〃10 イ〃2・8メートル

やっぱり戦闘は地味でした。主人公が非力幼女な分アクションはお父さんが担当なんですけど……彼も堅実安全着実優先の人なんで基本戦闘が地味に……

やってることは正直人間離れしてる気もしますが。

そしてやっぱり地味な魔法。ただこれはドウガが隕鉄製の短刀もつてたんで効果があんまりありませんでしたけど、なかった場合かなりひどい目にあいます。

例えるなら絶対逃れないサーチライトを浴びせられ続ける状態なわけで、遠距離から弓で狙われ続けて終わりです。夜戦で探照灯照射担当した駆逐艦がフルボッコにされる理論ですね。普通なら。

ちなみに隕鉄製の武器はドウガも言っているようにそんなに珍しいものではありませんので、魔法の武器扱いはしていません。一般的な暗殺者のご家庭なら二丁三本常備してるような代物です。成人のお祝いに送られたりしかねない程度のもんです。

お値段もさほどお高きはありません。

素材が隕石なだけで、製法事態に特殊性もなく、鍛造鑄造どちらで

も同じような効果を持ちますので。

＊ご意見ご感想お待ちしております

??・罾に落ちたモノ（前書き）

2012/01/13：サブタイトル修正

??・罾に落ちたモノ

「なぜあの場所が襲撃を受けている!」

目の前でわめいている神経質そうな痩せぎすの男を見ながら、この東の国境とは正反対の都市ベルゲンスタインに本店を構える大店ベックドーラ商会の幹部である五人の番頭の一人、マレイドはその伶俐な眼差しを柔和な笑みで隠して、どうしたものかと考えている。

ここ、カレント男爵領の領主であるウェイラード・カレントとマレイドがいるのはドウガたちが闘っている森からさらに南に五〇カイディほど離れた場所にある、カレント家の所有する四阿である。

男爵家が狩猟をおこなう際に休息を取るために作られたそれは小さいながらもなかなかの趣があり、近くには水場もしつらえてある。

その四阿の中、天井付近に灯されたランプの光の下、男爵は苛立たしげに忙しく歩き回り、腰を下ろしたマレイドが眺めているという構図だ。

最初にこの男…… 当時はカレント男爵総領息子だった…… と関わりを持ったのは、ただの偶然だった。

きっかけは別に珍しいことではない。

商会が運営している賭場に入ったりしていた客がこの男で、その賭場の運営を任されていたのが自分だったただけだ。

客と、厳密には違うが経営者の関係であった二人が深く関わるようになったのも、然程珍しい話ではない。

クロッサン王国がまだ大陸南方に存在する群雄の中の一国だっ

た頃。

その当時の首都であつたベルゲンスタインは、その歴史の深さから様々な知識も各所に集積されており、現在では学術と技芸の都市として存立している。そんなベルゲンスタインに遊学に来た男は、“学術”ではなく“技芸”……要するに賭博にはまり、身を持ち崩した。

本当に珍しい話ではない。

借金で首が回らなくなった男が、実の両親に勘当されそうになり、逆に両親を謀殺しカレント男爵党首様になるという結末を得るまでは。

狂気を孕んだ目で、密かに自分との面会を現男爵様が求めてきた当時を思い出し、マレイドは微笑みながら心の中で苦笑する。

両親を排除し自分が男爵になるための決意はしたが、計画する能力も実行する気概も持たなかった男のために、すべてを御膳立てし……念のため発覚した場合自分の名前が出ないような準備は入念に行い……男爵に仕立て上げた。

それから二年と少しかけ、複数の商会や小店、時には貴族の名前を使い少しずつ男爵領の土地を収得しつつ、ついでのように目立たないように領民の一部を奴隷として吸い上げる。

ここまで大胆に動けたのは、男爵領が東の国境に接しており、奴隷を国外へ運び出しやすいこと。直接接する貴族の領地はなく、辺境であるせいで管理が甘くなっている直轄領が周りを囲っているという、少し特殊な環境のお蔭もある。

が、さすがにこれだけ大きく動いたので、そろそろ何らかの査察が入るかもしれない。

その為、その最後の仕上げとして、この村の村長の息子……こちららは商才のなさで事業に失敗した愚か者だが……が、偶々手駒の中にいたのでこれで手仕舞いにするために今回の絵を描いたのである。発案者は一応男爵ではあるが、無論そうなるように仕向けたのはマレイドであり、今あの傭兵とやりあっている兵以外の手駒はすべて商会の息がかかったものになっている。

すべてはあの傭兵と、その傭兵が所属していたと思われる賊、そして男爵様が行ったことにして後腐れなくベルゲンスタインに帰る。

そのためにも男爵様にはもうしばらくここにいていただかなくてはいけない。

「いやいや、いくらあの男が手練れとは言いまでも、男爵様の手兵の手から逃れられるとは思いません。ここは下手に動かない方がよろしいかと」

「しかしだな」

「応戦に回した兵どもも、どうせ始末する予定だったのですから。

その手間をあの傭兵が省いてくださっていると思えば気にもなりませんまい」

「……うむ」

「そしてむしろこの場で死んでしまえば凶悪な盗賊団に対しひるまず闘ったという名誉が与えられることになるのです。これ以上喜ばしいことはないでしょう?」

何しろ与えるモノが名誉だけならば自分の懐が痛まない、というのが実にすばらしい。

「……」

「準備が整うまで、あと精霊が一回りするほどもかかりますまい。準備が整えばもうこの地へは戻れませぬが、なに、男爵様は私どもが責任を持って送り届けます故心安らかにして下さればよろしいかと」

「……わかった。よろしく計らってください」

「あ、エリアスタとミューリングへの街道なら封鎖したから、逃げるなら他をあたった方がよろしいですよ？」

不意に自分たちの会話に加わった声に、マレイドと男爵はびっくりと身体を震わせる。

「ちなみに伯爵領方面も塞がっています。というかまあ、全部露見しちゃってるんですけどね。裏付けもばっちりです」

朗らかとしか表現しようがない軽やかな女の声が再び響き、不意に光玉の強い光が当たりを照らし出す。

そこに立っていたのは村娘の格好をした一人の女だった。少しきつめの瞳と整った顔に柔和な微笑みを浮かべる、見たところ二〇くらい歳の鮮やかな赤い髪の女は、それだけが不自然極まりない武骨な剣を地面に立て、柄頭に両手を据えた姿勢で二人の事をにこやかに見据えている。

「いやー大変でしたよー。二ヶ月前に手仕舞いされてたら、ここまで届きませんでした。やっぱりあれですよー。商売人は引き際が大事ってことですよーね？」

まるで何かの冗談のように少女はそう言うと、一人で勝手に頷い

て見せる。

「あ、申し遅れました。私王国徴税室物流監査部特別監査官のディ―フィン―ヴォイドと申します。短いお付き合いになりますかと思いますが、よろしく願いしますね？」

村娘の格好で優雅に一礼する女に、マレイドは絶望の表情を浮かべ、引き際を誤った自分の判断に罵倒を並べ立てた。

徴税室物流監査部……徴税室の一部所のような名前が付いているが、ある程度の規模の商会ならば彼等がどういった権限を持ち、何を行っているか知悉している。

曰く金銭の獵犬。

国内国外の怪しげな金の流れを調査し、裏付けを取り、場合によっては実力行使さえ行う王室の見えざる金庫番。

「徴税室だと！？ここはカレント男爵領の中だ、徴税役人風情が自由に動き回る許可など与えていない！」

突然現れた少女に男爵は吠え立て、マレイドは噛みつきそうな表情で男爵を見やり、女は珍妙な生き物を見た時のような表情で男を眺める。

確かに普通の徴税官相手ならばその弁は通用するだろう。が、特別監査官は貴族領における自治権を超越する。

二〇年前に、どういった詐術を用いたのかその他さまざまな付帯事項まで丸ごと有力貴族の目をすり抜け、国法として施行されてしまっている。

「とつとと帰って上司に伝える！ここは私領であり、国の観察が入る権限はないはずだ！」

「……あ……まさかと思えますけど、本気で言ってますよね？」

「馬鹿にしているのか貴様！」

「いやまあ……貴族なら国の法くらいは覚えておきましょうよ？そりやうちの仕事はめちやくちゃ地味ですけど……認可された賭場だけで我慢できずに、違法賭博場に入り浸る暇はあったんでしょう？」

もう少し真面目に勉強に励んどいたほうがよろしかったですよねー？

女はそれだけ言うと、にっこりと微笑み二人に最後通告を告げた。

「一応生きてると私の査定も上がるんで嬉しいですけど、生死は問わずで室長の第二王女殿下から捕縛許可が出てますんで、抵抗したらバツサリですよー？あ、一応弁明の機会は与えられるんで期待してくださいね？」

その言葉が終わった直後闇の中から響いてくる音は……馬よりも軽快だが重厚な……角竜の足音か。

どこぞの騎士団まで投入されているのか……

女の正体を知るマレイドはその場で膝をついた。願わくばこの、いまだ状況も判らないまま喚き続ける愚かな男爵が無駄な抵抗をし、それに自分が巻き込まれることがないように祈りながら。

——糞っクソツクソツ！！！！

晶は優男の腕の中でもがこうとするが、自分の身体だというのに上手く動いてくれない。

確かに今の非力な体では、この細身の男の腕すら振りほどけないだろう。しかしほとんど動けないというのもあり得ない。

だというのに動けないのは明らかに、先ほど襲われた時の恐怖が自分の中のどこか深い所を壊してしまったからだだろう。

——結局……俺……足手まといになってる……

悔しくて、情けなくて涙が溢れてくる。

すんなりドウガのもとにたどり着けるとは、少女自身かなり難しいだろうことは覚悟していた。

しかし、これほどあっさり捕えられるとは少女も思っていなかった。

——こいつが……視界に入っただけで……

少女の身体はそれだけで恐怖に囚われ、ドウガのために持つてきたはずの剣を落としてしまい、その音のせいで優男に捕まり今、ドウガに対する人質として使われている。

どうしてそうなってしまったのか、少女にはもう理由が自分でもわかっている。

男が恐ろしいのだ。男という生き物が。

先刻襲われた恐怖が、自分のことを強烈に縛っている。理由はわかつているのに、こんな事じゃまずいと思っっているのに……本当の自分は男だというのに……

男が怖い。傍にいただけで体が硬直し、吐き気を催すくらいに。

「傭兵ドウガ、出てきなさい。さもなくばこの妖精種の命を……と言いたいところですが、とりあえず片目くらいは潰しますよ?」

男の声に、森の中から反応はない。

見捨てられたのかと、一瞬少女は思った。が、少女は首を振り、その考えを否定する。

他の男の事は知らない。男だった頃の自分ですら信用できない。しかしこの三日間一緒に行動したあの優しい大男なら……信用できる。

そのあとどうするかは判らないが、少なくともこの優男からは助けてくれる。

——……うん

闇の中から少女は一瞬、ドウガの気遣うような視線を感じる。それは錯覚なのかもしれない。が、少女はその感覚を信じた。あの男が何かをする。その時に自分がすることは……

——今だけは震える体を抑え、今だけは氣力を振り絞らないと……

少女は僅かに俯き、優男の足元を見る。男が履いているのはドウガのようなしつかりした作りの革製のブーツではなく、指先がむき出しのサンダル。

——ちょうどいい……これなら……

狙うのはそこから顔を見せている小指、その一本だけ。

小さく少女が頷いたのをどこかで確認したのか、それと同時に少女と優男の真横から飛来する真っ白い何か。

「ひっ!？」

情けない声を上げ、体をのけぞらせる優男に対して、勇氣を振り絞り無理やり嘲笑を浮かべ……軸足になっている男の左足の小指を思い切り、踵で踏みつける。

「ぎっ!？」

いくら少女のものとはいえ、その全身全霊を込めた踏み付けに思わず優男は拘束していた腕を離し

「こっ………まてっ………!」

少女は転がるように優男の元から離れる。それと入れ替わるように飛び出してきたドウガは男の手の中にある剣など、まるでそこに存在しない物かのように完全に無視して剛腕を振るい、男の顔面をとらえ、その勢いのまま地面に叩きつける。

——人間で弾むんだなあ……

殴られ、顔面を潰された優男の身体が地面で大きく跳ねる光景を見て、こんな時だというのになんともとぼけたことを考えてしまう少女。

しかしドウガと合流できたことは幸いだが、事態はむしろ悪化している。

一連の流れで流石に周囲に散っていた兵も集まり、ドウガと少女の頭上に再び光玉が浮かび上がり、其処此処から弓を引き絞る小さな音が漏れ聞こえてくる。

「これは……まずいか……」

ドウガはそう言うのと少女を見下ろし、少女は未だ止まらない涙を流しながら首を横に振る。

「……すまん」

何に対して謝るのか。ドウガがその言葉を口にし、少女は男の足にしがみつく。

そのまま場の緊張は高まり続け、ついに敗れるかと思われた直前。

「はいはい皆さんもう夜遊びの時間は終わりですよ？」

何とも気の抜けた男の声が夜の森に響いた。

??・罾に落ちたモノ（後書き）

恒例単位表

100ロイ＝1カーディ＝280メートル
100カーディ＝1ミル＝2・8キロ

ついにサブキャラらしいサブキャラが出ました。

徴税官です。

もっとわかりやすい組織名にしようかとも思っただんですが、個人的に好きなもんで。

秘密の徴税官とか秘密の国勢調査員とか秘密の出納係とか。

国勢調査員は秘密でも何でもないですし秘密の出納係とか横領とかやりそうですが。

そしてやっぱり最後まで名前出ませんでした村長。

ふへへ……優男で押し切ったぜ……

で、結局戦闘中に直接使用された魔法が光玉だけって……

＊ご意見ご感想お待ちしてます～

??・王女とドウガとアクイラと（前書き）

本日のキーワード：越後の縮緬問屋？

2012/01/13：サブタイトル修正：表現を微調整：段落の
修正

??・王女とドウガとアキイラと

高まる緊張を完全に無視し、光玉の明かりの元その場に現れたのは、二〇代半ばくらいの長身の男だった。

細身ではあるがしなやかさを感じさせる足取りと、その身に纏う純白の竜革の鎧がひととき洗練された印象を見る者に与えている。

その整った容貌に柔和な笑みを乗せ、それとは逆に妙な迫力をまとったその男は、まるで舞台に上がった俳優のようにやや芝居がかった態度で一度、ぐるりと辺りを見回し、それから仰々しく一礼し、口上を述べはじめた。

「この中にもご存知の方もいらっしゃると思いますが、不当な身柄略取、法的手続きに乗っ取らない人身売買。領内維持の放棄その他の罪状によりカレント男爵は所領の維持に関して甚だ適正に欠ける疑いがある。そう判断されました」

誰がそれを判断したのか。そこは伏せたまま男は言葉を続ける。

「まあ一応冤罪の可能性もあるので、男爵の身柄は一時拘束ののち、王都へ護送。その後査問を受けられることになっています」

——……それはもう釈明させる気なんかないんじゃないのか？

身体の震えはまだ収まっていないが、少女は男の口上に思いきり突っ込みを入れる。が、無論その言葉が表に出ることはないので男の口上はそのまま続くことになる。

「それに伴い一時的ですが、カレント男爵領における一切の“貴族

の義務と権利”が停止されることになりました。なお、男爵の処分が決定するまでの間この地の管理はヴォーゲン伯爵家に一任されることになりました」

が、私の口から述べただけでは皆さん納得されないでしょうから。

男はそう言う懐から“符”を三枚取り出し、口訣を唱える

「『接続』『同調』『投影』」

『……ん？どうしたガーティ。何か問題でも発生したか？』

直後、何もなかった空間に一人の人物の像が結ばれ、その姿が現れた瞬間周囲に動揺した気配が広がり、その場にいた兵士たちは武器を放り出し次々と跪いていく。

そこに現れたのは一人の女性だった。

蜂蜜色の髪を後ろで無造作に束ね、軍服のような固い印象を与える服をまとった硬質な印象を与える女性。二〇歳くらいに見えるその整った容貌の女性は、特徴的な大きな耳をぴくぴくさせつつ、こちらに視線を向けないまま手元の書類の束に注視している。

——俺と同じ……？

少女はその女性の耳を見て、自分の耳をそつと抑えた。自分のそれの方が大きくはあるが、女性が自分の同族であることを示す大きな耳。

「いえ、殿下。まあ私から説明をするよりも殿下御自ら命令をして頂いた方が面倒が少ないと判断しまして」

『相変わらず無精なやつめ。そこを上手くやるのがその方の仕事であらう?』

「厳密には私は殿下の命令系統には属してないんですけどね……一応今回の名目は監査官の護衛というだけです。まあ、あとは珍しい人物を見つけたので、殿下にお目にかけておこうかと」
『ほう?』

その言葉でようやく書類の束から顔を上げた女性は正面……といった表現が当てはまるのかはわからないが、正面にいたドウガを見て綺麗に整った、女性にしてはやや太い眉をはねさせ、ついで少女の方を見て……今度ははつきりと驚愕の表情を浮かべる、

が、すぐにその表情を隠してため息を一つついた。

『クロッサン王国第二王女ガレリア』アッシュ『エル』クロサーヌである。が、別に私の名はどうでもいい。今回の件に関しては徴税室室長として動いているからな。で、現在の状況であるが男爵は本日只今から査問を待つ身となり、同時にその権利の一切は凍結される。男爵に雇用されている者に対しては、追って沙汰があるまで自宅もしくは自室で待機。ああ、男爵の処分が決まるまでの給金は保証してやるからとっと帰って寝ろ。以上だ』

——……ぶっちゃけすぎだろ後半

最初はそれなりに体裁に則った台詞だったモノが後半はぶち壊しになっている点に、少女は再び突っ込みを入れたが、なんだか周りの人間は気にしていない。

ともかく『給金の保証』の言葉が効いたのか、『第二王女』の言葉が効いたのか……実際のところは『王国の金庫番』『守銭奴』と

そこに纏わる、一般国民にまで伝わっている逸話の数々が効いたのだが……兵士たちはまるで祟り神にでも出くわしたかのように蜘蛛の子を散らすように走り去っていく。

その光景にもう一度嘆息して見せると、王女はドウガに視線を向ける。その前にちらりと少女の方に視線を走らせたのは……

——気のせい気のせい……

妙に威圧のこもったその視線に、少女は気が付かないことにした。

『……さて、珍しい所でお会いしたものですな我が師よ』
「その呼び方はよせと言っていたはずだ」

女性は親愛の情と嫌味を含んだ声で。ドウガはうんざりした声で最初の言葉を交わしてみせる。

ドウガの傍らというか未だ脚に引つ付いたままの少女はその言葉のやり取りから、女性とドウガの関係について頭を巡らせたが……
結論。情報不足。

——なんか、話してる内容からするとこの国のお姫様らしいんだけれど……

少女のイメージするお姫様とか王女様という単語と、目の前で不敵……というよりもふてぶてしい笑顔を浮かべる女性がまったく一致しない。

王女様とはドレスを着て、優しくはかなげな美人……そういったありふれたイメージしかもっていなかった少女にとって、目の前に投影されている女性はなんというか軍人のような感じである。

——でも、軍人？ともなんか違うとい……あ

不意に少女の頭に一人の人物が思い浮かんだ。

それは、自分が働いていた会社の経理課長の女性。冷たい印象を与える美人で、金の扱いは慎重かつ几帳面。が、それ以外に関してはやたらに男前な性格だった『影の社長』

あの女性に、さらに威厳みたいなものをブレンドすると目の前の王女のようになりそうである。

——に、してもドウガが師匠？

あの短いやり取りだけで、様々な疑問が浮かんでくる。今まであまり気にしていなかったが……ドウガは一体どのような男なのか？

——それにあの耳……

ドウガの過去とか正体とかも気になるが、初めて見た自分以外の“妖精種”それが王女様らしいというのだからなんだか落ち着かない。人間のそれには見えない耳を持つあの女性が王女？ドウガから少しばかり聞いた話では、この国を治める王族は人間のはずであるのに。

『何を考えているかはよくわかるが、その問いには直接会った時にお答えしよう。妖精種の姫よ』

さらりと落とされる爆弾のような言葉に、少女は思わず目を見開いた。その視線の先にいる王女は、偉そうな雰囲気は漂わせたままにやにや笑いを浮かべている。まあ、実際偉いのは間違いないのだが。

——…はい？

「……この娘がエルメ＝ナンド第一氏族の血統だということのか？」

王女の言葉の衝撃から復帰した少女は、何言っただといった表情を浮かべ、ドウガは探るような厳しい視線を王女に向け、傍観者に徹していた男が何かおかしかったのか吹き出し、慌てて表情を取り繕う。

『ま、便宜上そう呼ばれているだけだ。血統的には何の関係もないであろうよ』

「……意味が分かったが」

『我が師はその辺りの事情を知る前に出奔されたからの。あと半年も我慢すれば耳に入れることもあつたろうに』

そう言っただけで王女は軽く唇を尖らせる。

『ま、それ故先程「直接会った時に伝える」と申したのである？我が師よ、まだ耄碌するには若すぎるぞ？』

「その呼び方をやめろ、と言ってるんだガリィ……」

『ようやくその名で呼んでくれたかドウルガー』

「一応お前は王女なんだからそうそう名で呼ぶこともできんだろう？」

『……さっきからの態度はとても王族に対するものではないと思うのだがな』

まあいい。それが父王がお前に与えた唯一の権利であるのだから。

王女はそう言っただけで表情を改める。

『古血統の妖精種を国内で保護した場合、あの耳長どもに通達し、面会をさせる協定になっている』

「……それはあちらに引き渡すという事か？」

そのドウガの言葉に少女はピクリと身体を震わせ、ドウガは労わるようにいつものようにやさしく頭を叩く。

その二人の仕草を見ていた王女は少しばかり不機嫌そうに眉を顰め、言葉を続ける。

『いや、面会場所は王都になる。具体的な場所はその時々だが過去の記録では王族の私邸が使われることが多いらしい。ああ、あちらに行くかどうかは本人の希望が優先される建前になっている』

「建て前か……」

『面談の際に古血統に対して“導眠”が使用されたこともある……らしいのでな。協定は守るが、大人しく従う気もないといったところか。ま、詳しい話はまた後ほどにな。ああそうだ……娘よ、名を伺っておこうか？』

「アキラだ」

『……なぜ我が師が答えるのだ？』

「そう呼ぶなど……声を失っているんだ。仕方あるまい」

『む……それは本当か？……いや、虚偽を申す理由もないか……済まなんだな……』

頭を下げる王女に対して少女は頭を横に振って応え、ぎこちなくも微笑んでみせる。

その表情を受け、ほっとした様子を見せる王女のその姿は演技なのか、それとも生来のものであるのか。

「殿下。そろそろ符の効果が切れる時間ですが」

にやにやとした笑いを浮かべながら黒子に徹する演技をしている男が、一応自分の職分を忘れていないことを主張するように、言葉を漏らす。

『……左様か。肝心なことの方は話せなかったが仕方ない……ま、私から話すことでもない故ドウルガー、事情はお主の弟と従妹から聞くがよい。それと……』

王女は一度言葉を切ると、しばし何かを躊躇うかのように瞳を揺らしてから視線を戻す。

『お主の息災な姿が見られたことを嬉しく思う。それと……だ。その、いくら美しくてもだな。その娘……そのような幼い娘に手を出すのはまかりならんかな？ そんなことをしたら地の果てまでもお主の事を……』

言葉の途中で投影されていた、顔を真っ赤にさせ、なんだか涙ぐんでいる王女の映像がフツリと消え去る。

残されたのは何とも言えない、非常に気まずい空気ばかり。

「……何を口走ってるんだあいつは……」

ドウガはそう呟き、少女は肩をすくめて首を振る。

——深く考えるといろいろへこみそうです……

というのが少女の抱いた感想だった。

そして残されたあの男は……今にも膝をつきそうな勢いで爆笑していた。

??・王女とドウガとアキラと（後書き）

このお話には突込みが足りない！

というか突っ込みは入ってるのほとんどアキラのみなので、ボケが止まらないというか。

まあ適切な突っ込み役は……出るのかな？

とりあえず少しずつ新キャラ入つつ風呂敷を広げつつ、畳める所は畳んでいく感じになりそうです。

ドウガと王女の過去は、そのうち……書くのか？

魔法というか符の使用法に関してはおいおい説明が入るか……多分

??・少女とドウガ(前書き)

本日のキーワード:ちよつとだけ解説

:萌え?

??・少女とドウガ

「やってしまった……」

クロッサン王国第二王女はガレリアは、先ほどまでしていた遠話の最後の最後でやらかしてしまったことを思い出し、自分の城である徴税室室長室の簡素な机で頭を抱えていた。

今この時自分がいる場所が己の自室であつたなら、間違いなく部屋中を転がりまわっていたに違いない自信がある。

——最初はうまく表情を取り繕っていたはずだ……多分。きっと、恐らく……自信はないけど……

「……だつて二年振りだつたんだぞ……」

最後に会つたのは一応王城であつた。が、その時はそれが最後だとは思つていなかった。

いつものように挨拶をし、いつものように剣の稽古をつけてもらい、いつものように挨拶を交わし仕事場へ向かおうと思つた時、しばらく国を離れると切り出されたのだ。

その時どんな表情を見せたのか、自分でもよく思い出せない。というよりも三日間ほどの記憶がなかった。

決済の書類に不備はなかったため仕事は滞りなくこなしていたとは思つが。

「……少しはそれらしく振舞えると思つていたのに……」

自分がああ男から、女性としてはあまり見られていないのは知っ

ている。最初に出会った時の自分があまりにも幼かったから、妹の様に思われているのは理解している。

だが、そこから一步でも踏み出したい思いは昔から……今でも強く思っている。

だからこそ懸命に、『有能な』『凛々しい』『聡明な』女性と言われる普段の態度を貫き通そうとしていたのに……

「……なんであんな女の子と一緒にいるのよ」

あの黒髪 of 古血統の少女……あの少女がドウルガーの脚にしがみつき、あまつさえ頭を撫でられるという光景を見たために吹っ飛んでしまった。

「……ドリイお兄ちゃんのおばか……」

顔を真っ赤にして呟いた王女の声は、普段『守銭奴』と陰口をたたかれ『王国の金庫番』と恐れられている女傑のものとしては、か弱く幼いものだった。

大笑いを続けている男を無視して、ドウガは少女の前に跪いていた。

死地から脱したことで、ようやく少女の様子が普段と……会ってからまだ三日しか経っていないが……大分違うことに気が付いたのだ。

そもそもこの少女は今まであまり、自分に甘えるような態度はとってきていない。頼りにしてくれているし、信用もしてくれているようだが、必要以上にべたべた纏わりついてきたりはしない。

あの森の中でも、子供ならばもっと大人に甘えてもいいはずなのに、足場の悪さに顔を顰めながらも黙々と、なるべく自分の足で歩くことを選んでいたくらいなのだ。

結果足首を痛めて自分が丸一日腕に抱えて運んだこともあったのだが。

ともかく、子供なりに一種の好ましい矜持を持っていた少女が、何かから自分の身体を守ろうとするかのように、男の足にぴったり身を寄せてきていたのだ。好ましからざる何かがあつたのにきまっている。

「……殴られたのか？」

少女の薄い唇の端が切れ、そこはまだ傷口が塞がらないのか薄く血が滲んでいる。

頬も紅く腫れ、よく見れば目元には青い痣までできている。

「服も……誰かに襲われたのか？」

着ている服も自分が用意したものではなく、やや大きめの服を工夫して纏っているという事は、その前のものは着られなくなったという事なのだろう。

「……大丈夫だったか？」

何が大丈夫なのか、自分でもわからないままかけた問いかけに、

少女は一瞬首を横に振りかけ、縦に小さく振る。

「何が……あつた？」

「恐らく……というより、間違いなくあいつらの仲間に暴行されそうになったんでしょう。村の住まいの一つに黒焦げの死体が一つありましたから」

いつの間に笑いを治めたのか、長身の男は探るような瞳で少女を見つめている。

その弟の視線を不快そうな表情で窺め、男は黙って視線を逸らす。

「少し臭うが、我慢しろ」

ドウガは腰のポーチの中から、怪我をした時のために取っておいてある薄絹の端切れを取り出し、少女の口元を丁寧に拭いてやり、炎症止めの軟膏を丁寧に擦り込んでいく。

「……俺が渡した符の中には確かに雷の符もあつた。しかしこの娘は言葉を話すことが出来ないんだぞ？一応励起文を念じれば発動はするが……人を殺すまでの威力は出ないはずだ」

「兄上……“希い奉る”系統の励起文を含んだ術式は、もともと妖精種のもですよ？今は“符”という系統に収められています、あれらは精霊に働きかける系統のそれです」

“符”はもともとそれを必要とせずに、複数の術式を使用できる妖精種に対抗するために生み出された魔術道具である。あらかじめ“符”に一定の魔力を注入しておくことで、詠唱時間の破棄、発動確率と命中精度の向上、術式の安定性の確保を狙い、『極小の魔術的才能でも使用できる万能性』を得るために作られたもので、それ故に通常なら“符”に触れた上で“口訣”を唱えることでのみ発動

するように条件付けがされている。

それ以外の、たとえば少女にドウガが説明したような使い方をする場合、威力が極端に抑えられる形で発動させる形がある。が、これは『口訣』という鍵を使わずに扉の隙間から効果をかすめ取る行為であるため、微弱な効果が発揮されるのだらうといわれている。

が、元をたどれば“符”に籠められる魔法には源流が存在している。魔術が万人のものではなく複雑な印と呪文と大きな魔力を必要とする源流が。

そして特に『希い奉る』の一文が入っている符は、もともと妖精種が使用していた魔術が源流である場合が多い。

「つまり、妖精種である彼女は、本来の威力ある術を“符”を用いずに使えるわけです。が、残念ながら喋れないので妖精種流のやり方でも術が発現することはありえない。ですが、“符”が触媒の役割を果たして本来の威力を発揮してしまった。そんな所でしょうか」
「……迂闊だった……」

弟のその言葉で、男は自分がこの少女に何をさせてしまったのかに気が付いた。

普段の少女らしさを感じさせない、おどおどとしてこちらを見上げる瞳。いつもならまっすぐこちらを見つめてくる黒い瞳は何かを悔いるように、何かを訴えるかのように揺れ動いている。

「完全に私の失態だ」

自分が知っている同じくらいの年齢の子供より、遥かにしっかりと娘だったので失念していた。言葉は使えなくとも、その分表情や仕草で自分の意思をしっかりと伝えることを常に考えている娘だっ

たので忘れていた。

そんな内面の葛藤を少女は見抜いたのか、少女は自分の目線の高さになっていくドウガの顔に優しく、それでいて厳しい視線を投げかける。

——気にするな。

言葉が使えるなら少女は目の前の男にそう言いたかった。

確かに、殺したかったわけじゃない。それ自体に関する強烈な忌避感と罪悪感も、いまだ治まっていない。

しかし、過程はどうあれあの男を殺したのは間違いなく自分なのだから、目の前の男がそのことで嘆くのは間違っている。というよりも腹立たしい。

——辛くても、それをこの男に丸投げして自分だけヌクヌクしているなんて、そんなことは俺自身が許せない

当分は男という存在そのものが恐怖の対象になってしまう予感がひしひしとするし、実際ドウガの弟がそばにいただけで意味のない恐怖に襲われそうになるが、それだって全部自分でどうにかしなければいけない傷だ。

——それすら自分から取り上げることは、この男でも許せない

その少女の気持ち、気迫を受け止めたのか……暫くの間少女を見つめていたドウガは、首を一つ横に振ると立ち上がった。

そして、傍らに転がっていた自分の愛剣を改めて掴み、少女を見る。

「……一つ確認しておきたいんだが……ひょっとしてお前は俺に剣を届けようとしてくれていたのか？」

その男の言葉に少女は……恐らく自分が捕まったことを恥じているのだろうか？しばらく俯いたままでしたが、小さく一度だけ、首を縦に振った。

「……そうか……」

ドウガは一度目を閉じ、再び開くとともに、朗らかな笑顔を浮かべて少女に礼を述べた。

「命がけで助けに来てくれたんだな。ありがとうアキラ」

——……っ！

その、初めて見る何の陰りもない笑顔に少女は一瞬息をのみ、そして慌てて頭を横に振る。

——今のは気のせい今のは気のせい俺は男俺は男……ああもう何でドキドキしてんだようっ！

そんな、謎の葛藤を始めた少女の事を訝しそうに眺めていたドウガは、少しばかり調子が戻ったようだと言判断し弟の方に視線を向けた。

「大方の所は予想がついているが……伯爵殿そいう事なのか？」
「つれないですね兄上。私の事も名前でお呼びくださってもよろしいでしょうに」

「けじめだ」

「ま、兄上らしいですね。で、兄上のおっしゃるそういうことです
が、恐らくそうなんでしょう。まあ、私も今回は使い走りみたいな
もので……そろそろディーが来る頃かと思えますので説明は彼
女にでも」

「従妹殿も来ているのか？」

「今回の担当官が彼女なんですよ……と、来たようです」

その言葉に少女は何かわかるかと耳を澄ませたが、特に変化があ
るとは思えない。が、目の前の二人の男はそれが分かったらしい。

「角竜を二五……ディーを入れて三一騎か。随分連れてきたんだな
？」

「相変わらずおかしな耳をお持ちですね……まあ演習という名目も
付けましたので。兄上のお蔭で空振りになってしまいました」

——むう……よくわかるな二人とも。俺には全然……ん？

少しずつ遠くから遠雷のような音が近付いてくる。やがてそれは
低く轟く轟音になり、多数の光玉を頭上に灯した巨大な生物の集団
が、二人の男と少女の目の前に姿を現した。

——すっげえ……

そこにいたのは、洗練された体躯を誇る巨大な鱗を持つ四足の獣
だった。

全体的なフォームは、竜という言葉からくるイメージよりもかな
り馬に近い。身体との対比のせいだろうか。少女が知る馬よりも少
しばかり大きな精悍な、竜という言葉にふさわしい頭。その大きな
頭を支える太い首と、立派な体躯。尻尾はさすがにトカゲのイメー
ジが強い太く長いもの。その脚は少女の知識にある競馬馬よりも長

くかなり太めだが、鈍重というよりも頑丈といった印象がある。
しかしもつとも特徴的なのは、その鼻先にある一本の角だろう。
太く、しかし鋭いその角は巨大な剣の先のようにも見える。

ちらりと横眼で見るドウガよりも、遥かにその頭の位置が高いことを考えると、少女の知る単位では全高三メートル、体長は五メートル近くあるだろうか？

少女は初めて見る異形の、しかしこの世界で言うところの家畜でもあるうその生物に心惹かれるかのように恐る恐る近づき、その感触を確かめようとそろそろと手を伸ばし、

「あぶないよー？うちの子乱暴者だから、知らない人噛むからねー」

君みたいに小さい子は頭からパツクリだよ？

途中で何者かに抱き留められる。

慌てて振り向いた少女の視線の先にいたのは、自分が今着ている服によく似た服を着た、光玉の光を受け赤く輝く髪を持つ女性だった。

??・少女とドウガ（後書き）

とりあえず簡単な魔法の解説入りましたー

ただまあ、これだけだとあんまり説明になってないんでやはりどこかで魔法講座みたいのやるべきかどうか……

そして久しぶりに出ました異世界らしい動物。

イメージはサラブレッドではなく重種。北海道のばんえい競馬に出てくるあれをでっかくした感じです。

最初は肉食系の動物のイメージで考えてたんですが、それだと騎士団とか戦場で効果を発揮するほどの数を揃えると、維持費がえらいことになるので草食系統のイメージに落ち着きました。

まあそっち系の設定はそのうち別の話に移植でもして再利用するとして。

そろそろストックが尽きてきてるので、このままどこまで毎日更新ができるのかわかりませんが、しばらくは勢いに任せていっちゃってみようと思います。

ある程度区切りつかないと他のものに手を出せませんし。

*ご意見ご感想お待ちします〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0752ba/>

この空の下、大地の上で

2012年1月13日19時50分発行